

---

## THE TEAM! (2)

緒例

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

THE TEAM! (2)

【ZPDF】  
NO939E

### 【作者名】

緒俐

### 【あらすじ】

掃除屋「TEAM」を営む篠原快の家に、長期任務に出でていた面々が戻つて来た。しかし、何やらまた大きな任務が快達バスターに襲い掛かるうとしていて・・・

## プロローグ1

暁星学院の近くにある九条高校。  
高い進学率を誇るその高校に、  
一つの事件が起ころうとしていた。  
どこからどう見ても纖細という美少女が、  
放課後の科学室に呼び出されていた。

「待たせたね」

「沢崎先生・・・」

可憐な美少女は声のした方を向く。

彼女を呼び出したのはまだ三十分ばの科学の教師だ。  
生徒の人気も高く、女生徒からの告白も絶えない。  
そんな教師が、今日はいつもと違った。

「さて、今日君を呼び出したのは他でもない。  
僕の愛を受け取つてもらうためだ」

いきなりの発言に美少女は戸惑う。  
その現れかのように、  
グレーのセーラー服が僅かに揺れた。

「さすがに驚いているね。  
だけど大丈夫だ。  
怖いことは何もないから  
「いやつー」

少女は声を発したが、

いきなりそれすらも不可能になつた。

「無駄な抵抗は止したほうがいいよ。

僕はかつてバスターをしていてね。

それも

「時空タイプ」と書いて時間を操る能力者なんだよ。  
だから君は逃げられないんだ」

美少女は必死に抵抗する。

しかしそれにも構わず、沢崎は近寄ってきた。

「どうしてもというなら記憶を消してあげよう。

まあ、今まで残してほしいと言つた生徒はいないけどね」

「当たり前です。

だから私たちは苦労させられたのですから」

いきなり少女が声を発した。

それに沢崎は驚く！

「私達が今回与えられた任務は、  
時空タイプのバスターの捕獲です。  
覚悟してください」

しかし、そこで諦める男でもなかつた。

「フツ、君が例えバスターでも、  
一般的のバスターでは私は倒せない」

しかし、その言葉はすぐに搔き消された。

沢崎は自分の体の感覚を失つたのだ。

立ち上がる力が消されて地面に倒れる。  
そして少女がとどめの言葉を刺す！

「御存じじゃないんですか？  
私たちは影です」

少女がそう呟いた。

それを聞いて男の顔は青ざめる。

「影だと・・・・！」

まさかあの

「TEAM」の特殊部隊か！

それが事実だった・・・・

## プロローグ1（後書き）

第一弾がやつて参りました！今後ともよろしくお願いします

## プロローグ2

TEAM特殊部隊

「影」。

掃除屋の中でも特に秀でているものが属するエリート部隊。目の前にいる少女はその名を発した。

「時空タイプの捜査は私の専門でしたが、まさかこの高校に三人もバスターがいるとも思わなかつたので、一人ずつの捜査に一ヶ月費やしてしまいました。だけど、ようやく尻尾を出してくださいましたことに感謝します」

しかし、沢崎は力を再び増幅させ始めた。

「ふざけるな！ たかが十六の小娘に捕まるか！」  
「捕まりますよ。  
実力の差は時空タイプならとっくにわかつてゐるはずです」  
「認めん！ 貴様の時間を操作する！  
タイムドール！」

沢崎は少女の時間を操作しようと術を放つ！  
しかし、少女は冷静だった。  
そして一言で片付ける！

「リバース！」  
「ぐつ！！」

術は簡単に返された。

時空魔法の勝負は実に簡単。

いかに時間を支配できるかだ。

「勝負あります。」

倒れてください、  
沢崎先生」

強い衝撃波が腹部に叩き込まれ、

そして少女は呼ばれた。

「終わつたか、咲」

後ろを振り返ると、

「彼女と同じ高校一年生の少年が、どこからどう見ても、わんぱく少年にしか見えない。」

「これで任務も終わりました。みなさんと合流できますね」

咲はニッコリ笑うと、

白い歯を見せて龍一も笑つた。

「ああ。帰れるんだな、  
暁星学院に！」

「篠原快」と・・・・・  
世間を騒がすバスター、  
二人のバスターは合流することになる。



## プロローグ2（後書き）

いよいよ次回は本編です お楽しみに！

## 第一話・事件発生

名門・篠星学院。

今日も朝から生徒たちが朝練に明け暮れる中、  
高一のバスタークラスでは、  
一つの速報が飛び込んで来た！

「大変よ！ 快君が知らない女の子と歩いていた！」  
「なつ・・・・・！」

カレカノ同盟全員が言葉を失った。

今や世間で

「篠原快」の名前を知らぬものはいない。

「掃除屋・TEAM」の天才高校生バスターだ。  
しかし、篠星学院では、

彼の容姿端麗、成績優秀、運動神経抜群が人気の理由だが・・・

「ちょっと翡翠！ あんた快から何も聞いてないの！」

同じTEAMのバスターである山岡優奈は、  
快の思い人であるはずの風野翡翠に尋ねたが、  
「特に何も言つてなかつたよ？」

さらさらのボブカットがわずかに揺れた。

特に気にしないのも長年の付き合いだからこそ。

何かあれば快が言つてくれる信じているからこそ、  
翡翠は特に嫉妬しない。

自分の彼氏でもないのだから・・・

そしてすぐに噂の主は、いつも通り教室に入つて来るのだ。

「ちょっと快君！ 昨日一緒に歩いてた女の子誰！」

「篠原！ お前翡翠がいながら何を考えてるんだ！」

「そうよ… 見損なつたわ！」

次々と浴びせられる批難。

そして反論させてくれないのもこのメンツならでは。  
しかしそれを打ち破つたのは、

意外な人物であった。

「おい、お前説明してなかつたのか？」

剣道部の朝練から教室にやつて来たのは時枝修だ。  
それに快も相槌を打つ。

「ああ、こいつらすぐに突つ掛かつてきてよ。

幕星小の奴らなら絶対知つてゐるによ」

それを聞いた幼なじみ達は驚く！

「おい、まさか陽子が戻つて來たのか！」

「ああ。それにうるさいのもな…」

快は心の底から溜息をついた。

そして予鈴が鳴るのだった…

## 第一話・事件発生（後書き）

ようやく本編です。お楽しみください。

## 第一話・転校生

予鈴から一分後、色鳥白真は猛ダッシュで教室に飛び込んで来た！

「快ちゃん！　あいつが帰つてくれるー。」

白真是嬉しさ全開だ。

しかし、それとは対称的な態度を快はとる。

「あいつ？　あいつじゃ分からん。  
一体誰のことを指してるんだ？」

まるで答えたくもなさそつな表情をして、  
快は深い溜息をついた。

「龍一だよー　瀬野龍一ー。」

それに咲もうちのクラスに入るつてー。

「咲ちゃんが戻つてくるのー。」

翡翠は歓喜の声をあげた。

九条高校は寮制のため、  
しばらく篠原邸に戻つてこなかつたのである。  
そんな彼女が帰つてくるとこつのだ。

「賑やかになつそうだな  
「全くだ・・・・・」

修の言葉に快は「これまで以上の溜息をついた。

「お前達！ さつさと席につけ！」

担任の大原がチャイムより早い  
「声着」を出す。

これで座らないものがいないだけ、  
このクラスは平和である。

「今日は転校生を紹介する。

知っているものも多いと思うが、

瀬野、和泉、相川入れ

そして三人の生徒が教室に入ると大歓声が上がった！

「うわあ！ 可愛い！！」

「美人！ 彼氏持ちか！？」

「TEAMのとこばっかりずるいぞ！」

「一人ぐらいうちに寄越せ！」

瀬野龍一以外を除いて、

二人の美少女に注目は注がれる。

「黙れ！ 咲は俺の婚約者だ！  
近寄るんじゃねえ！」

元気少年瀬野龍一からの爆弾発言。  
少し頬を紅く染めた和泉咲を見て、  
クラス中が絶叫した！

「ええ／＼！…！」

しかし、それを笑みを浮かべて相川陽子は聞いていたのだった。

## 第二話・ホームルーム

龍一の爆弾発言により、  
スタークラスの反応は様々だつたが、  
そこを締め直すのが担任の大原である。

「瀬野、お前から自己紹介しろ」

「うつす。瀬野龍一だ。

TEAMでお世話になつてゐる。

特技は剣道。当然、打倒・色鳥白真！  
そして、咲とは親同士が決めた許婚だ。  
何があつても手を出すな」

もはや白真以上の独占欲の塊だと認識された。  
しかし、TEAMの面々は、

龍一の方が独占欲を押さえてると思つてはいるわけだが・・・

「次、和泉」

「はい。和泉咲です。

私もTEAMでお世話になつております。  
部活は弓道部に所属しようと考へております。  
よろしくお願ひします」

ようやくまともな空氣になつてきた。

拍手が起つたのも、

このクラスの血口紹介では珍しいことだ。

「よし、それじゃあ相川

「はい。相川陽子です。

私は中学三年間、アメリカに留学していました。  
なので日本語の文法がおかしくなつてたら「めんなさい」

そして陽子が礼をすると、  
また質問が飛び交う。

「陽子ちゃんって彼氏持ち?」  
「どんな子がタイプ?」  
「やっぱり快君が好きなの?」  
「それよつづりして昨日快君と歩いてたの?」

それは誰もが思つていたこと。  
そして視線は快に注がれる。

「今日から家に下宿するから、  
その買ひ出しに付き合わされてたんだよ」  
「なる」

担任の大原までが頷く。

説明さえ出来ればこのクラスは落ち着くのだ。

「とりあえず三人とも空いてる席につけ。  
それと期末まであと一週間だ。  
全員赤点にならないように!」

そしてホームルームは終わったのである。

## 第四話・授業

一時間目に陽子の流暢な英語を聞き、二時間目に咲の夢心地な古文を聞き、そして三時間目は・・・

「瀬野龍一！ お前は転校初日から居眠りか！」

担任の大原が怒鳴り声をあげる数学になる。

「だつてよく大原ちゃん。  
俺は昨日徹夜の任務でさ」

「バカモン！  
バスターなら一日ぐらい徹夜できる体質だろ？！  
言い訳になるか！」

周りのメンバーは頷く。  
体力自体が異常なことなど、  
長年バスタークラスの担任をやっていれば、  
嫌でも分かるのである。

「ちえつ！ 翔と大地がこいつ日に任務とは・・・」

赤点仲間の二人の名前を出すが、

「翔は数学だけ得意だぞ」「  
だよな。意外だが」

これまたクラスの面々は頷く。

「静かに！ とにかくこりは期末範囲だ。

TEAMには篠原も時枝もいる。

早田に今まで学習した内容を聞いておけよ。  
では次の問題を山岡」

「はい」

優奈は前に出て問題を解き始める。

そうこうしているうち、「元気ひいき」

あつとこう間に数学の授業は終わるのだった。

そして昼休憩・・・・

「全くお前は！

中学のときから何も変わつてねえな」

弁当にありつきながら、

快は龍一に文句をたれるが、

「やう怒るな。お前とは頭の出来もちがつしな

龍一はカラカラ笑う。

「・・・・お前が

「影」によく配属されたと思つよ。  
つのHマーク部隊だつてのこ

快は少し声を落としてこつた。

「影」はその名のとおりの部隊なのだから・・・・

「まつ、実力実力！」

それより修は一緒に飯喰わねえのか？」

今ここにいるのは快、白真、龍一だ。  
修はいなかつた。

「修ちゃんは陽子と飯食つてるんじゃない？」

白真の答えにクラス中が三人の方を向いた。

## 第五話・修と陽子

「陽子ちゃん、修君は付き合っていたの？」

バスタークラスはまたまた騒ぎ始めた。  
しかし、相変わらず快は冷静である。

「まあな。とはいっても、  
三年間音信不通だつたから、  
今の状態がどうかは知らんが」

弁当箱を包みながら快は答えた。

ただこの三年間、

修は彼女を作らなかつたことだけが事実である。

「だけど、陽子はどうなんだろうな。  
あの器量で男が言い寄つてこないことはないだらうし」

龍一も人の倍の昼食を完食して話に加わる。  
そして翡翠に視線が注がれる。

「大丈夫！　陽子ちゃんは修ちゃんのことが好きだよ！  
だつて三年前より美人になつたんだもん！」

翡翠がそう言えばそうだと思つ。

一人が三年前のままであつてほしいと願つのだった。

そして噂の一人は……

「」の二年間、どうだった？」

「別に何も変わらないな。」

快の家で居候になつたこと以外「

弁当箱の中身はなかなか減らない。  
特にしゃべつてるわけでもないが、

一人とも背中合わせで昼食をとつていた。

「あら、聞いた話では修のファンクラブの会員数が増えたみたいだ  
けど」

「興味ないな」

あつさつと修は返した。

自分のことより、陽子の話の方が気になつていた。

「相変わらずね。」

その分だと彼女がいなつて話も本当みたいね」

「お前が彼女だろ。」

それともこの二年間で俺は消えたのか？」

少しだけ修は苛立つている。  
それが空氣で伝わつて來た。

「まさか。私はずっと修が好きだったもの」

陽子は少し悲しそうに笑つた。

「だったらどうして手紙も寄越さなかつた？」

「それは・・・・・」

それ以上、陽子は何も言わなかつた。

## 第六話・威圧

TEAM本社。

この日学校を休んで任務に出ていたのは、橋大地、片岡翔、美原紫織の三人である。この三人に与えられていた任務は、いつもの任務より少し重大なものだった。

「社長、私たちが盗んで来た細胞のサンプル、一体何に使用するつもりですか?」

紫織が尋ねる。

彼女達の今回の任務は

「盗み」。

普通なら犯罪だが、

掃除屋の世界では正当化される。

もちろん、場合によっては裁かれるが……

「こいつ? 僕もよく分からないな。

化学はかじってる程度だしい」

顔はかなりのイケメンなのに、

今日は股引きに腹巻姿の社長、

篠原義臣は相変わらず抜けた答えを返す。

しかし、この男が掃除屋界最強と謳われるバスターだからこそ、このTEAMには優秀な人材が集まつてくるわけだが……

「ふざけないで下さい。

勝手にデータを見させてもらいましたが、

なぜか快の名前が出てきました。

それに社長の細胞まで

そこまで言つと、紫織は立つていられなくなつた。

威圧されたのだ、義臣に！

「社長！」

翔と大地も食いかかるが、  
すぐにそれも搔き消される！

「悪いな。お前達には話せない事情もあるからな。  
これ以上深入りすることは禁ずる。

だが心配するな。

俺はお前達の保護者もある。  
だから裏切つたりはしないよ」

そして義臣はいつもの笑顔を向ける。  
そんなことは分かつているのだが、  
この時ばかりは、不安に駆り立てられるのだった・・・

それから三人が退出後、  
妻の夢乃が部屋に入ってきた。  
しかし、今日はいつもと少しだけ違つた。

「あの子達を威圧するなんて、  
随分ひどい社長ですね」  
「理由は聞いてくれるんだろ？」「..

そつとて義臣は夢乃に書類を手渡した。

## 第七話・事件の幕開け

「あれ？ 大地ちゃんなんか元気なさそうだね。何があつたの？」

不思議な顔をして翡翠は尋ねる。  
TEAMの食堂でコシク見習いの少年は、いつもは元気に鍋をふるつているが、今日はどこか変だ。

「ほつときなさい。  
また料理長に大目玉くらつたんでしょう？」

大地の彼女である優奈はワカメスープを口に運んだ。とはいっても、少しばかりは心配しているが・・・。

「ああ、そんなところだがな。

紫織は大丈夫なのか？」

自分達以上にショックを受けた紫織は、食堂にも顔を出さなかつた。

「紫織は寝てるよ。  
やつぱり疲れてたのかな、  
連日の任務だつたんでしょ」

違うと思ったのは大地と翔だけ。  
しかし、義臣が威圧したとは口が裂けても言えなかつた。

「 そうか。白が帰つて来たら食事を紫織の部屋に運ばせる。だが、快の奴はどうしたんだ？ 寝てるわけもないだろ？ 」

最もな問い合わせに食堂にいた面々は首を傾げた。快が所属するサッカー部の練習は休み。剣道部と弓道部が遅くなると聞こえてるぐらうだ。

「 次の任務の打ち合わせかしら？ ブラッジ崩壊以来、

大きな任務が来てないでしょ？ 「 そうだね。だけど、やな予感がする・・・」

翡翠はブラッジと戦つた時と同じ、不安が胸を埋め尽くしていた。

そしてその当人は・・・

「 俺は飯が食いたいんだがな、社長」

夕食前に呼び出され、快は「機嫌ななめなのだが、義臣はあっけらかんとして答えた。

「 さう怒るなつて！

お前に面白い任務を流してやるからさ

義臣は書類を快に投げ渡した。

それが今回の事件の幕開けだった。



「細胞バンク……これって  
「影」の管轄だろ。

それを俺達にやれって言いたいのか

一通りのデータを見終わつた快は義臣に意見する。  
自分はいいとしても、  
チームメイトにこの任務は危険過ぎる。

「ああ、そうだと思うがな。

翔達に細胞の盗みの任務やらせちやつたし

そこまで言つと、

義臣の前髪がパラリときられた。

「ふざけてんのかクソオヤジ！」

青い闘気が快の手を覆つていてる。

それが義臣の前髪を切り落としていた。

「いやいや、ふざけてはなよ。

それにあの三人にやらせた理由も後から分かるから。  
それより、今回のチーム編成なんだけど、

龍一と咲、それに陽子を付けようと思つんだが

「それはかまわねえよ。

龍一「はともかく、咲と陽子はかなりの手練だしな」

龍一「がいれば間違いなく飛び蹴りの一発は入る返答をする。

「それだけどな、陽子には気をつけておいてくれ。

アメリカの影達からの連絡でな、

陽子は細胞バンクの奴らと関わりを持つたらしい。  
その実態を明らかにするためにも、

今日はお前と組ませる。

もちろん、援護は安心しろ」

僅かばかり、義臣は陽子を疑っていた。  
本来なら疑いたくないのだろうが、  
TEAM全ての命を守るために、  
厳しさだけは捨てるわけにはいかないのだ。  
それがたとえ自分の息子でもだ。

「分かった。

「つちも期末前で忙しいからな、  
出来るだけ早く下調べしてくれよ」

ケチだけ付けて、快は社長室から消えた。

「いいのですか、社長。

快さんにこちらの任務を手伝っていただいても」  
「気配の消し方、やらないつまくなつたな、咲」

天井に潜んでいたのは咲だった。  
快に気配を悟られないものなど、  
早々いるものではない。

「とりあえず大丈夫だ。

あいつはもともと影に入った方がいいぐらいだしな」

「いいえ、そちらの方ではあつません」

咲が心配する意味は「あと語られる。  
消して口の当たる」とを望まない、  
影の情報として・・・

## 第九話・剣道部

「白と時枝とやりあえる奴がいたとは……」「ああ、今年の全国は団体戦で優勝できるかもな」

龍一は転校初日にして、  
ちょっととした注目を浴びることになった。  
それは咲との婚約宣言の性ではない。

咲との婚約宣言は、  
あまりにも恥ずかしがった咲が、  
時空魔法の一つ、  
「記憶操作」で消し去ったのである。  
注目を浴びてる理由は、

龍一の剣道の腕だ。

「なんだ。全く鎧び付いてないのか」「お前、相変わらずの余裕だな」

打ち合っているのは修と龍一だ。

中学三年間、全国準優勝を飾る修は、  
幕星学院のエースになっていた。  
もちろん白真もだ。

「鎧び付いてないって、

瀬野は前の高校で剣道部に入つてなかつたのか?」「そうつすよ。

短期の潜伏任務だと田立つわけにはいかないし

白真はさうりつと答える。

バスターだからこそ、通じる理由である。

龍一は九条高校で剣道部に所属しなかつた。したとしても、どのみち記憶は消されるからだ。潜伏した痕跡は残さない。

それが影の絶対的条件である。

「ふうん。まつ、うちとしては強いやつは歓迎するがな」

余計な詮索をしないのも、

第星学院ならでは。

したとしても、その記憶すら消されるのだが・・・

「だけど先輩、あいつは頑悪いから試合に出られるか分かりませんよ?」

「なんだと白一。」

試合をやつちのけで龍一は白真に食つてかかるが、

「わらい、聞こえた?」

相変わらず無邪気な返答を白真はよこす。

本当にこの少年が全国三連霸をやつてのけたのか、疑わしくなるときも多々ある。

「決まつてゐるだろ?」

龍一は白真に竹刀を振り下ろすが、

「面一、俺の一本勝ち」

修は龍一の背後から容赦なく面を喰らわせる。  
それを笑う者多数・・・・・

「修・・・・・テメハ～～～！～！」

怒り狂つた龍一を相手にするのは面倒ではあるが、  
この時ばかりはさすがに修も樂しかったのである。

「修ちゃんが笑うなんて珍しい」

由真の咳きでこの日の日の練習は終わった。

## 第十話・「まかし無用

「よお、よつやく帰つて來たか」

広い玄関の前でぱつたりと剣道部三人組と快は出くわした。

「ただいま快ちゃんー！」

由真は快に抱きついたしだが、  
快はひらりと避ける。

「たつたとシャワー浴びてー」。  
そのまま食堂にいくなよ」

「学校で浴びて來たよー！  
剣道部に対する偏見反対ー！」

夏場の剣道部は確かに汗まみれになるが、  
一日中あの異臭を放っているわけでもない。

「偏見じゃなーさ。

ただいつもにまして温度が高く感じただけだ」

「快、それは間違いないな」

修は同意する。

そして視線は龍一へと向くのだ。

「おい、お前らなんか俺に怨みでもあるのか・・・

今日の部活といい快の態度といい、

やけに一人は龍一に突つ掛かっていた。

「確かにそうだね。

快ちゃんは龍一のことを翡翠が話しているのが気にくわないだけ  
でしょ」

「お前らまだくつついてねえのー?」

快のザンヒツが龍一に直撃する。

「だけど、修ちゃんは陽子絡みのことを龍一が隠しているのが気にく  
わないんでしょ」

核心に迫る発言が龍一を逃さない。

しかし、やはり

「影」は飾りじゃない。

「隠すも何も、快の方が詳しいんじゃねえの?」

今日にでも義臣の命令が下ることを、  
龍一は知っていたのである。

「どうなのかな、快ちゃん」

快はため息をついた。

どっちに転んでも、由真の思つ轟にななるわけだ。

「下ってるよ。

細胞バンクの調査依頼、または交戦の可能性ありのな。  
近いうちにお前らにも援護要請が来るや。」  
ただ、

「影」の任務だ。

俺と龍二でも教えられてないことがある

「en」

陽子のことはうまくかわした。

大きな任務だと言えば、

少しばかりことを躊躇わせることが出来るからだ。

「 そうか。 だが、 快。

後からもう少し詳しく教えろよ」

修に「まかしが効くはずがなかつた・・・

## 第十話・いまかし無用（後書き）

久しぶりの更新です またよろしくお願ひします

## 第十一話・宣戦布告

快の部屋は比較的のものがない。

あるいは机にベットに木製のテーブル。  
そして滅多につけないテレビだ。  
服はすべてクローゼットの中である。

そんな部屋に今、

親友の修はサラサラとペンを動かしながら、  
この部屋の主に尋問しているのである。

「で、社長は陽子の動向を探れと言つてゐるわけだ」

「ああ、そういうことだ。

あいつらの前で言つたら大騒ぎになるからな」

修の陽子に対する思いを知つてゐるからいや、  
快は全てを打ち明けた。

だが、自分の彼女が監視されているのも、  
あまり気分は良くないだろう。

「まつ、仕方のないことだな」

「なんだ、あまりショックを受けた感じはないな」

修の意外な反応に快は少し驚く。

「まあな。陽子に毎晩聞いたからな。

向こうで任務に失敗して俺と連絡が取れなくなつたってな

「失敗つて……陽子の性じやないだう。

あいつの隊の隊長がミスつて陽子は田を付けられたんだ。  
連絡も取れなくなるほどのことなら親父が動くだう」

快の言ひ方とはあくまでも理論的だ。  
しかし、修だから分かることがある。

「結論はな。だが、心はそっぽいかないだろつ。  
あいつは生き残つたんだからよ・・・・・」

その頃、陽子は義臣に呼び出されていた。  
それは尋問を受けるため・・・・・

「なるほど、これが三年間の成果か。  
かなりの情報を提供してくれたもんだ」  
「ええ、細胞バンクの支部ですか。  
本部の情報を掴みやすかつたです」

あくまでも調査報告に陽子は徹しよつとしていた。  
しかし、義臣がそれを見抜けないはずがない。

「陽子、今いくつの盗聴器が付けられてる?  
いや、術もあるんだろうが」  
「さあ、わかりません」  
「だろうな。だが、答えは簡単だ。  
全て消せば数える必要はない！」

巨大な水泡が陽子を飲み込むと、  
水泡は光弾けた！

「ゲホゲホッ・・・・！」

陽子は嘆せる。

そして泣いた・・・

「細胞バンクに宣戦布告だ。

三年前に何が起こったのか全てを話せ。

TEAM本社が動く」

義臣は宣言した。

## 第十一話・尋問

「・・・三年前、私達の隊が細胞バンクに潜入し、大きな過失をおかしてしまいました」

「ああ、俺の細胞と快の細胞があいつらの手に渡つたことだらう。だが、そいつは取り返したんだ。

今更気に病むことなどないだろ?」

その任務が翔達が遂行したものであった。

三年前、万が一自分の細胞が相手のものになつたとしても、必ず日本の細胞バンク本部に戻るよつに策を練つていたのだ。

「それだけではありません。

確かに社長と快の細胞の分析は困難となり、三年間で解析することが支部では不可能でした。しかし、利用する方法を見つけたものがいました」

「風野博士か・・・」

翡翠の父である風野博士は、

掃除屋界では天才科学者でその名を轟かせている。中でも

「デビル・アイ」の研究は、

数ヶ月前に崩壊した

「ブラツド」に大きな戦力をもたらしていた。

「はい、風野博士の研究のテーマの一つであった

「クローン」。

それに快の細胞が取り込まれたのです

「そしてどうなつた?」

義臣の目つきが厳しくなる。

「実験は成功。

快の細胞、いえ、能力を持つクローン人間が完成しました。  
その力は今の快を超えていきます。

「なるほど、そりや厄介だな」

義臣は笑った。

まるで全てを予想していたかのようだ……。

「とりあえず、クローンは快に潰させる。

オリジナルがたつた一パーセントにもみたない細胞に負けてたら  
話にならない。

何より、風野博士の研究を利用している細胞バンクに、  
そろそろ制裁を加えてやろうと思ってたところだ。  
そういうことだから覚悟しとけよ

陽子の耳についていたミクロサイズの盗聴器が、  
パチンという音を立てて潰れた。

「社長！」

「これで宣戦布告は終了。

だが、陽子。

俺にはまだ気掛かりなことがある。

お前ほどの使い手が細胞バンクの支部で失態を犯すとは思えない。  
ましてや、あいつが隊長だったにもかかわらず、  
お前をここまで追い込めるはずがない。

三年前にお前の兄貴達は何をやらかした?」

陽子はピクリと動搖した。

だが、刺される視線は彼女を逃すはずがない。

「……兄達は、裏切られて殺されたんですね」「まさか！」

義臣はハツとした。

「そのまさかです。

兄の、哲兄さんの婚約者でありチームメートだった香に……」「

## 第十一話・二年前の「ショーション

中学入学前、相川家の兄妹達は留学とこつ名のもと、アメリカの細胞バンク支部に、潜入調査を命じられたことになった。

「修、待つてね。

手紙も書くし電話もするよ。

だから忘れないでね」

涙ながら陽子は言つと、

修は相変わらず不器用な態度で答えた。

「長年の幼なじみを忘れる阿保がいるかよ。さつと行つてこい」

これが最後だった。

その後三年間、陽子にとつて最悪の日々が始まる・・・

□元まで隠した黒装束。

まるで忍者のような出で立ち。

中学一年生の幼き少女を、

闇の世界へ誘つた証だった・・・

「哲兄さん、学兄さん、

敵は眠らせて來たよ」

陽子は不適な笑みを浮かべた。

細胞バンク支部、任務はいたって簡単だった。  
細胞バンクの細胞のデータを全て回収すること。  
それを義臣に送ればよかつた。

「香、地図は頭に入つてるか？」

「それを私に聞く？」

ふわふわの茶色のロングヘアの美女は、  
膨れつ面をして答えた。

彼女が哲の婚約者だった。

「そりや、一番とちりそつなのがお前だからよ」  
「私は立派なバスターです！  
せつせつピーターの回収に行くわよー。」

香は瞬身でその場から消えた。

「兄さん、あまりからかつてやるなよ。  
来年には結婚するんだろ」

学は少しからかつ口調で兄に叫びつが、

「さあな、戻れるのが来年になればいいんだがな  
「どうこいつこと？。」

陽子は不思議そうな顔をした。

そして、彼女の目の前に試験管が一つ出される。

「陽子、もし何かあれば敵にそいつを渡せ。  
殺されることは決してない。」

バスターならいくらでも機転を利かせた理由が言えるな  
いつになく真剣な面持ちで哲は尋ねると、

「もしもの時でしょ。

大丈夫、兄さんが隊長で失敗するわけがないわ。

それに私だって

「影」の一員なのよ。

簡単にやられるもんですか」

陽子は一ツ「リ笑つた。

それに安心するかのように、

哲は微笑を浮かべると、

「じゃあ行くか。

凄腕のバスターと一緒にやらかし」

眠らないバスターとの戦いが始まろうとしていた。

## 第十四話：裏切った女

細胞バンク支部。

迷路のような構造になつてゐる館内は、余程方向感覚がなければ迷つてしまつ。しかし、地図を見ている暇などバスターにはない。そしてもし迷つたときには必ず相手の気配を感じ取る。重要な場所ほど強い奴は出て来るものなのだから……。

「お嬢さん、お困りかい？」

「困りはしないわ。道に迷わない限りね」

陽子はそつけなく言い放つ。

彼女が使つた催眠術に応じなかつただけあつて、なかなかの気力を持つバスターであることは間違いない。

「うかうか。だが、俺はお嬢さんの抹殺が任務でね、ここで死んでもらわなければ困るんだよ」

男はにたりと笑つた。

「そう。だけど、私も任務遂行のためにあなたを殺さなければならぬわ」

「殺しを認めないTEAMが言つても説得力はないが」

「そうね、だけど

「影」は殺しの許可が下つてゐる。

全ては掃除屋の均衡を保つためにね

そして舞い散る血の雨。  
ほっておけば間違いなく死ぬ。

「なつ！」

斬られたことすら分からなかつた。  
しかし、自分は血を流している。

「あともつて一時間。  
私は子供だから直接殺したりはしない。  
だからここで私と戦つて寿命を縮めるかどうかはあなた次第。  
動けば30分も持ちはしないけど」

子供とは思えない冷たい視線が男に突き刺さる。  
しかし、ここで男はその場に腰を下ろすと、

「酷なもんだな。

掃除屋という業種は任務のために命をかけなければならぬことは  
「それが私達の成すべきことでしょ」  
「いや、違うな」

男は懐から小銃を取り出し、  
それを一気に飲み干すと、  
見る見るうちに再生していく！

「再生能力・・・性質が悪いわね  
「いや、少しばかり違うな。

「これはお前の一つ上の兄、相川学だ」

陽子は声を抑えた。

動搖を見せれば相手の思う壺だ。

「ほう、やはり訓練は積んでいるようだ。  
だが、これは信じるしかないだろ？」「

カツカツとハイヒールの靴音が近づいてくる。  
そして陽子は目を疑つた！

「ごめんね、陽子ちゃん。

お兄さん一人とも殺しちやつたわ」

片手で引きずられた兄達の死体。  
それを引きずつっていたのが香だつた・・・

## 第十四話・裏切った女（後書き）

お久しぶりですー。みづやまへりかちも書けました。楽しんでくださいね  
と幸いです。

## 第十五話・戦乱の予感

香と結婚すると決まつたとき、哲はすこく照れた表情をして、学と一緒になつてからかった。しかし、一人の兄はもう息もなかつた。

「掃除屋

「TEAM」。

裏切りには本当に弱いのね。

私がピンチと言えば疑いもなくやつてくるし、婚約すれば骨抜きにもなる。

おかげさまで二人の細胞とエネルギー、バツチリ頂いたわ。

そういうことだから陽子ちゃんも死んでくれる?」

未だ理解できなかつた。

頭の中は混乱していた。

だが、涙はなかつた。

「香、その必要はない。

ボスの命令はこのお嬢ちゃんをスパイにすることだ」

「ライ、冗談は止して頂戴。

細胞バンクはTEAMの細胞を欲しがつてゐるのよ。実験体が多いほうがいいのよ」

香は魔力を鋭い刃へと変える。

「そのお嬢ちゃんの力はまだ変化する。四系統のどれにも当たらないものだ。」  
「この所長として興味があつてね」

ライは陽子を実験体として見ていた。  
体術・召喚・治療・自然系のどれにも当たらない陽子の特殊能力。  
TEAMの細胞と言うだけでも魅力的だが、  
その変化を記録することも研究者として逃したくはないのだ。

「だつたら私にも何か頂戴。

なければこの子を今すぐに殺して私の研究材料にするわ  
「だつたらこれをあげる」

陽子は快と義臣の細胞サンプルを投げ渡した。

「篠原義臣の細胞なら文句ないでしょ。  
快の細胞だつてある。

私はまだ死にたくないの。

TEAMのスパイにぐらいなつてあげるわ

ポーカーフェイスがこれほどきついものだとは思わなかつた。  
しかし、ここで自分に残された道は一つしかない。

「本物かどうかは怪しいけど・・・・いいわよ。  
確かにこれはかなりの力を持つものの細胞。  
しつかりTEAMを潰すために利用してあげる」

香は最上級の笑みを浮かべた。

「これが三年前の裏切りです。

私は生き残るため、兄達の敵を打つため、TEAMの情報を奴らに流した。

社長、あなたの力と秘密も・・・

「構わないさ」

義臣はまたもさりと答えた。

「お前がやられっぱなしな訳がない。

そして俺の能力を奴らが全て解析出来るはずもない。

今回は俺も動く。

奴らが何をしてこようとも、

お前を死なせたりはしないからな

戦乱が始まろうとしていた・・・

## 第十六話・召集命令

壁に耳あり障子に目あり。

しかし、TEAMの場合は少し違つ。

「屋根裏にバスターあり床下に悪ガキあり」となる。

「さて、そろそろ姿を見せたらどうだ？」

義臣は笑いながら言つと、

高校生バスター達は姿を現した。

「バレバレか。社長には敵わないな」「だよね～、ちょっとずるいな」

白真と翡翠は相変わらず勘のいい義臣には敵ないという表情を浮かべた。

「無理ないぞ。咲だつて見付かつたんだろ？  
俺達じゃ一発だ」

翔は冷静に分析した。  
それに大地も頷く。

「まあ、お前らが来てくれてちょうど良かつたよ。  
お前達四人が今回の先発隊になつてもらつ。  
快達本隊が到着したら速やかに戦線から離脱。  
その後研究室の破壊に回れ」

「ちょっと待てよ。

俺達はいいとしても、翡翠は治療兵だ。  
先発隊に使つてもいいのか？」

白真がもつともなことを言つが、

「問題ないさ。それに聞いてただひつ。  
今回は俺が動くんだ。  
正確に言えば俺のチームが動くんだ。  
勝算はありますぎるほどだ」

自信に満ちた顔は経験と絶対的な力から来るもの。  
それを相手にするものが不幸としか思えない。

「だけどよ、お前ら期末試験の勉強してるのか？」

それを聞いた高校生達は固まつた。  
現実は厳しいものである。

「快様～～～～！～！」

陽子を残し、高校生達は快のもとへと走り出した。

「陽子も勉強しとけよ。

お前はスターでもあるが、  
あいつらと同じ高校生だう」

優しい笑顔が心中に染み渡る。

陽子は深々と頭を下げて、  
瞬身でその場から消えた。

「ということになったから、  
あいつらに連絡してくれる? 夢乃さん」

社長室にある隠し扉から夢乃は出て来た。

彼女の気配の消し方は、

高校生バスター達に分かるものではない。

「それはいいけど、みんなに連絡どるのは厳しくない?  
数人はまだ任務に就かせてるのでしょう?」

かつて自分達とともに戦つたメンバーは散り散りになつていて、  
白真と翔の父親は連絡すらともに取れない状況だ。

「ああ、あの一人は無理だが、  
うちの料理長と時枝警視総監殿は動けるだろ。  
そしてあいつもいけるさ」  
「・・・苦労しかかけないのね。  
また怒られるわよ」

夢乃は深い溜息をついた。

## 第十七話・テスト勉強

「だからさ、なんでお前らはテスト前にならじーじーに来るんだ?」

もはや快の部屋にテスト前に駆け込むことは、中学に入学したときからのお決まりである。快としては、修と大人しく勉強する方が樂でいいのだが、そうさせないのが他のメンバーである。

白真に至つては、ほぼノリでこの部屋に来ている。

「まあまあ、快ちゃん!  
みんなでやつた方が早く終わるよ。  
何より楽しくていいでしょ!」

「」のノリで毎回学年ベ스트スリーに入るのが色鳥白真という奴である。

「白ちゃんの言つとおりだよ!」  
大原ちゃんの数学の問題つて難しいじゃない

翡翠も意見する。

ちなみに翡翠も数学以外は学年上位である。

「そうだぞ。ほら、」の英文なんて訳すんだ?」  
「俺は文法そのものが分からん!」

赤点コンビの翔と大地はすでに快のノートを奪っていた。

「勝手に人のノート奪うな!」

「あら？ 快、JJIの範囲今回追加されたの？」

紫織が自分ノートと見比べながら尋ねる。

彼女が来ることまだ良しとしている。

自分が休んだときは、

紫織がノートを貸してくれることが多々あるためだ。

「ああ、いけるとこまでいきたいらしいからさ。

まあ、暗記が増えただけだから問題ないだろ？」

「そうね。じゃあ化学のノートは貸しどくから、

リーディングのノートは借りるわ」

等価交換の成立に快は賛成派である。

「それより修ちゃん、

陽子と一緒に勉強しなくていいの？

今回誰も範囲教えてないんじやない？」

おそらくそれはないが、

修と話をする機会を『』えるために白真がついた嘘だらけで分かる。

「心配するな。

あいつは頭の出来が違うからな

「だったら行つてこい。

この数式の答えが違つてるからな

快の指摘に全員がニヤリと笑つた。

毎回満点しかとらない数学の問題を間違えることは、

それだけ何かが引っ掛かってるということ。

「・・・隊長命令なら仕方ないか」

そして修は快の部屋を出て行った。

「あの二人大丈夫なのかな?」

翡翠が不安そうな声で言つた。

「大丈夫だろ。修は陽子が好きなんだからさ」

「快ちゃんがそんなこと言つなんて明日は雨かな」

白真が言つたとおり、翌日は雨になつた。

通学はいつも翡翠と一緒にだ。

いつもみんな互いに朝練がない日だが……

「本当に雨にならなかった。

田中さんが言つたとおりにならなかったね」

翡翠は笑いながら快に言つと、

当人は不可抗力とでも言つたそつた顔で答える。

「梅雨時なんだから仕方ないだろ？」

それにも、修のやつ陽子とつまへこつたのか？

昨日の勉強会以降、修の姿を見ていな。

いつものように警察からの任務に借り出されたからだ。

そして何より気掛かりなのが、

今回の任務に修は加えられなかつたこと。

陽子が関わつてゐるなら、

義臣の性格上、修を入れると思つてこたのだが。

「わかんないな。

修ちやん恋愛についてはまだ話してくれないもんね

翡翠の言つとおり、親友の快こすり恋愛については話してくれないもんね  
い。

もともと、その方面を話題とすることがないと言えはない。

よつほど困つたことになれば、

自然に翔達が動いてくれるせもあるのだが。

「だいたい、修のやつは焦つたことがなぞ過ぎる。

陽子みたいな良い奴に悪い虫が付かないわけもないだろう」

「そう言えば先輩達に人気あるみたいだよ。

陽子ちゃんと咲ちゃんのファンクラブ出来たんだって」

「龍一が間違いなく荒れるな・・・」

咲の婚約者であるだけに、

龍一の荒れようが嫌でも浮かんでくる。

白真がそうだったように、

龍一も代表者を締め上げるだろう。

「話がそれたな。

それより翡翠、お前に頼みがあるんだが

「何？」

快が翡翠にものを頼むことなど滅多にないことだった。

「陽子の動向をしばらくの間見ていってほしいんだ。

一応俺も警戒はしてるんだが、

何かあつたあとじや遅いからさ」

本当は少しだけ違う。

陽子を見張れというのが任務。

しかし、それを伝えればチームワークが乱れる恐れがある。

「・・・分かった。

だけど、快、私は信じてるからね。

陽子ちゃんのこともおじ様のこととも

「ああ、すまない」

雨は少しだけ勢いを増した。

そしてその頃、学校に来客者が現れる。

「篠原君、久しぶりだね」

学園長が懐かしそうな笑みを浮かべると、

「ああ、久しぶり！

実はさ、少し頼みたいことが」

「もう少しその口の聞き方は直せんのか！ 篠原義臣ー」

そして現れる快達の担任であり、

かつて自分達を受け持っていた大原が入室して來た。

「大原ちゃん！ ちょうどよかつた。  
頼みたいことがあるんだ」

大原は少しだけしかめつづらになつた。

## 第十八話・雨（後書き）

しばらく放置してました、すみません！　いよいよ話もバトルに入り始めます。期待していくください（する人がいるのか！？）

## 第十九話・大原ちゃん

篠原義臣という男は、昔から掴みどころがない。その男の頼み事となれば、当然厄介事だ。

「一体何を頼んでくる?」

「あつ、大原ちゃん相変わらず嫌そうな顔だ。そんなことじや 血圧上がるぞ」

「お前が上げたんだろう!」

全く、教師生活二十四年でお前達ほど手のかかった奴らはおらん!」

大原は義臣に文句をたれるが、それはどこか嬉しそうでもある。

「まあまあ、その分息子はしつかりしてるから許してくれよ  
「佐原に似た性だろ?」

「佐原」は夢乃の旧姓である。

「まあな。それでさ、大原ちゃん、瀬野の行方知らない?  
俺達の情報網でもあいつは捕まらないんだ。」

「大原ちゃんなら少しは分かるんじやないかと思つてや」

「・・・TEAMの情報網に引っ掛からないとは瀬野らしいが、  
息子はどう思つてるのかね」

大原は溜息をついた。

息子の瀬野龍一は、おそらく物心つく前に父親が行方不明になつてゐる。

その理由は未だ龍一に語られていないが……

「龍一はまっすぐ育つてるよ。

で、どうなの大原ちゃん」

「……おそらくエジプト辺りだらうな。

ただし、三日前の情報だ

「充分だ。どうもありがと」

義臣は瞬身でその場から消えた。

「やはり忙しそうですね、篠原君は」

学園長は穏やかな笑みを浮かべていつと、

「少しだけ焦つてる感じにも見えました。

おそらく、瀬野まで召集をかけなければならない事態なんでしょう。

細胞バンクが絡んでると聞いていますからね」

「……そうですか。

ですがうちの卒業生なんですから大丈夫ですよ

学園長はお茶を一杯飲んだ。

その頃、修は一つの真実にたどり着いていた。

「何なんだよ、このデータ」

細胞バンクから届いたのであらう、

一人の人間のデータを見て修は青くなる。

「デザインチャイルドというものだ。

お前がよく知ってるお仲間だろ？」

「誰だ！」

修は背後からかけられた声に對して殺氣を放つ。

「私が？」 アメリカの細胞バンク支部の所長だ。

名はライ・タナーと言つ。

博学な時枝修なら聞いたことはあるだろ？」

「・・・なるほど、生物学者なりこいつを造れそうだ」

修はあくまでも冷静をよそう。

「こんなことが現実になつていいはずがない。

「そうだな、まさか私の研究をTEAMが取り入れていたなんて知らなかつた。

篠原義臣はやはり天才と言つわけだ」

ライは不敵に笑つた。

## 第一十話・影の部隊長

信じられない事実は田の前にある。

それを本当に自分達のボスがやつたなんて思いたくはない。

「ライ・タナー。おしゃべりはまだにしてください」

「咲……！」

突如その場に咲が現れる。

黒装束の出で立ちから影の任務で来たことは明らかだ。

「これはこれは、和泉咲嬢。

影の部隊長自らお出ましとは

「社長の命令だからです。

ライ・タナーを始末せよとの司令が下しましたから」

修は息を飲んだ。

その殺気はとても自分が入り込めるものではなかつた。咲が影に所属している以上、分かつてはいたことだが……

「なるほど、確かに本氣らしいが私もここで終わるなくてね。そこにはる時枝修の細胞が必要だからな！」

高らかな金属音が響き渡る！

ライと咲の短刀が交じり合つた。

「修さん！　すぐにこの場から逃げてください！」

「瞬間移動だけは使わないでくださいね！」

「ああ！　すぐに増援を連れてくる！」

開け放たれていた窓から修は飛び出した。  
あの場に残つても自分が役に立てる」とはないと判断できたからだ。

「あの程度のスピードならー。」

ライは修のもとへ移動しようとしたが、咲がそれをさせない。  
時空使いだからこそ出来ることがある。

「言つたはずです。

修さんのもとへは行かせません。

あなたの時空移動は私が封じ込めます。

タイムルーム！

咲とライを取り巻く時空間が歪む。

簡単に言えば、時間の感覚を無くしたということだ。

「なるほど、確かにこれでは時枝修を追い掛けられんな

ライは咲に向けて殺氣を放つ。

それは獲物を奪つたものに対する獣のようだ。

「・・・・ようやく本性が現れてくれましたね。  
私も手加減するわけには参りませんね」

咲は直槍を取り出した。

それは時空の中に閉まつている彼女の武器だ。  
時空タイプが無敵の強さを誇るもの、  
いろいろな戦い方を併せ持つものが多いからだ。

「なに、今ここで取り逃がしたとしても、  
影の部隊長殿が代わりにサンプルとなってくれる。  
それもまた魅力的なんですね」

次の瞬間、咲は左に飛びライの攻撃をよける。

「ほう、いい判断だ」

ライが触れた床は見る見るうちに溶けていき、  
それはライのエネルギーへと変わる。

「溶解術……噂通りですね」

「そういうことだ。咲嬢」

ライは不気味な笑みを浮かべた。

## 第一十一話・元・影の総隊長

「メルト」

「くつ！…」

咲は紙一重で避ける。

いくら時空系といえども、相手が自分を上回る力を持つていれば強敵となる。ライは様々な人間の細胞をエネルギーに変えて来たと同時に、その能力までも身につけていた。

「相手の時間を支配できない気分はどうかな、咲嬢？」「最悪です。敵なら尚更ですね」

それだけ答える余裕があったのはさすがと言つべきだった。影の部隊長の実力は相手と冷静に戦うスキルも要求される。

「実に結構な答えだ。

しかし、その細胞を頂く…！」

「きやあ…！」

乙女らしい叫び声が響く。

しかし、それが罠だとライはすぐに見破つた。

「咲嬢、そんな幻術など私には効かない！」

「くつ！…リターン…！」

溶解する手が咲の肩に触れた直後、咲は時間を巻き戻し肩を元に戻す。

むちむち、ライの奪ったエネルギーも無効化される。

「すばらしい能力だ！ タスガ影の部隊長殿だ！  
その細胞を寄越せ……」

まるで獣のよう！ライは咲に飛び掛かつて来た！

「させません！ ストップ！…」  
「うひ…」

ライの体は制止する。

その隙をついて咲は鎧を換装する。

「散りなさい！」

「かかつたな」

皮肉な笑みが咲に恐怖を与えた。

そしてライの欲望を満たす光景が浮かび上がる。

「その細胞、確かにいただいた」

自分の体が少しずつ溶けていく。  
時を支配する力がない・・・

「時空系といえども点穴をつかれでは魔力は出せない。  
だが、私は優しいほうでね、  
遺したい言葉だけは聞いておく主義だ。  
お前は何を遺す？」

虚ろな意識の中で咲は答える。

「あなたに勝てる人が後ろにいます」  
「なつ……」

咲はライの手の中から消える。

そして助けた人物の手の中にいた。

「全く、義臣の奴も大原ちゃんも人使いが荒いもんだ。  
高校生スターが手に負えるレベルじゃないだろうに」

「飘々とした、しかしじこからか恐るべき威圧感が溢れ出している  
男がライを見ている。

掃除屋界でかつて篠原義臣の部隊で暗躍していた男、  
そして今回召集された元・影の総隊長、

「瀬野龍一！」

「ああ、正解だ」

瀬野龍一の父親だった。

まずい予感がしていた。

珍しく咲とは違う任務につかされていた龍一は、TEAM本社に戻った途端、息を切らして戻つて来た修から咲のピンチを聞かされたのである。そして闇の中を四つの影が走り出す。

「もつと飛ばせ！－

咲が殺されたら殺した奴を灰にしてやる！－」

とても影の部隊に所属しているとは思えない言動だが、それだけ咲のことが大切だと友人達は知っている。

「落ち着け、龍一。相手はライ・タナーだ。

冷静さを欠けば足手まといにしかならないだらう

咲は冷静だった。若干の焦りは見えるが、咲の実力を知らないわけではないからだ。

そして幸運なことに、治療兵である翡翠が同じ部隊にいれば、咲が重傷でも命だけは取り留めることが出来る。

「龍一、咲は殺されていないことだけは確かだ。だが、とんでもない力を持った奴が乱入してやがる」「修ちゃん、この力の持ち主は敵なの？」

翡翠は不安そうな目をして修に尋ねるが、

「いや、敵とは思えないな。

何と無くだが、社長に似た感じがする

そして、その力の持ち主は余裕そうな表情でライを見ていた。

「瀬野龍一・・・・・！」

「食えた目をこっちに向けるな。

まつ、俺も考古学者だから研究対象に関する興味を抑えられない  
気持ちちは分かるが」

カラカラと龍一は笑う。

少し苦しそうな息をしながら、咲は龍一に尋ねた。

「おじ様、どうしてここに？」

「ん？ 義臣から聞いてないのか？」

細胞バンクを潰すために召集がかけられたことを

たたき付ける霸気が味方にさえ恐怖を『』える。

元・影の総隊長の実力は健在である。

「・・・・・篠原義臣もだいぶ焦っているようだ。

「一体何を知られるわけにはいかないんだろうな」「お前だって知らない癖して偉そうにするな。

あいつの隠したいことはそのまま闇の中に置いときやいいんだ。余計な詮索はする必要はない。

そしてそれが嫌なら

「

パチンと指を鳴らした途端、ライの体が土に変わっていく！

「なつ！… 幻術か！…」

しゃべる口までが少しづつ土になつていく。

「いや、それは現実に起つてこないじだ。  
お前は溶解術を使うなら分かるだらつ?

この世には人間を他の物質に変えることが出来るつ

もはやライはしゃべる」とされなくなつた。  
そして龍一はライから背を向けると、

「永遠に消えろ」

ライは土になつた・・・

## 第一二二話・対面

「ここから先は我々影の管轄です。

戻つていただけますか、快様」

咲を助けるために急いでいた四人は足止めを喰らつた。

TEAM特別部隊の影。

そのメンツは龍一も会つたことがない者達だつた。

「断る。咲は確かに影の部隊長だが、

今回は俺達と同じバスターとして動くんだ。いくら社長命令でも聞くわけにはいかない」

快は凛とした態度で言つが、  
影達はそれを聞き入れはしない。

「快様、社長命令を着実にこなすのが我々の使命。  
どうしてもというなら氣絶していただきます」

「そんな物騒なことやるな。

義臣の命令なら俺がかたを付けたはずだからよ」

突如はいつてきた声に、影達は片膝立ちになり頭を下げる。

その場にいた者全てが驚きを隠せなかつた。

「お前達はすぐに次の任務に移れ。

「龍一 おじさん！」

「親父……」

事態は思つてた以上に厄介なことになつてゐるからな

元・影の総隊長は厳格な表情で命令を下した直後、影達は闇へと消えていった。

「さて、久しぶりだな。龍一」

「・・・咲を助けたんだろうな」

少し不服そうな顔をして龍一は父親と向き合つと、

「ああ、だが今度の任務には参加させられる容態ではない。今、夢乃が集中治療を施してゐるから命は助かるだろうが」命が保障されたというだけマシといえばマシなのだが、義臣が力を見誤るような任務を咲に与えたという時点で快は不振に思つた。

「龍一おじさん、社長は何を焦つてゐる?  
いくらなんでもらしくないんじやないか?」

快の意見はもつとも。

高校生バスター達は龍一に詰め寄るが、

「快、確かに今回の咲の任務は奴の判断ミスだ。  
だが、ライ・タナーの本来の実力は間違いなく咲以下だった。  
咲の時空魔法を破れるものなど掃除屋界でも数少ないからな」

敵の能力を熟知しないかぎり義臣は一人だけに危険な任務を「え  
ない。

しかし、それでもここ数日の義臣はどこか余裕が見られないのだ。

「龍一 おじさん、本当に親父は大丈夫なのか？」

滅多に見せない快の不安そうな顔は、  
龍一 ですら少しは何か伝えてやりたいと思わせるが、

「快、お前は知らないでいい。

今回のお前の任務は細胞バンクの壊滅だ。

ただそれだけに力を注げ。

そして修、お前が咲の代わりに快のチームに入れ」

夜はまた深くなつた・・・

## 第一十四話・義臣の決断

物心付くころには父親は行方不明、いや、正確に言えば遺跡発掘のために世界を放浪してた。写真は見ていたからすぐに父親だとわかったが、いきなり現れて自分の大切な婚約者をさつさと助けて、現在社長室に閉じこもっているのである。

「面白くねえ」

「そう怒るな。気持ちは分からんでもないがな」

苛々している龍一を快は冷静に宥める。

しかし、宥めている本人も決していい気分というわけではなかつた。

社長室に盗聴器でも付けてやりたいところだが、ちゃんとほらんながらも最強の男がそれを見破らないわけもないのだから・・・

「だけど、何話しているんだろうね」

「今度の作戦か失態の反省つてところだろう。それに俺達に聞かれたくない影の内容かだな」

修の予想は半分だけ当たつていた。

「よく集まつてくれたな、脩三、龍一、太陽、そして夢乃さん」

最後だけ間違いなく愛妻家の声のピントが上がった。

この場に集まつたのは修、龍一、大地の父親達である。かつて最強のバスターとして掃除屋界にその名を轟かせた人物達だ。

「まつたく、こつちはとっくにバスターを引退した身だつて言つのに、大原ちゃんの情報網まで利用して探すなんてなんてひどい奴だ。世界の遺跡が俺を待つてるつて言うのによ」

龍一は高校卒業とともに遺跡探索に出た男である。

影の総隊長の役柄は義臣が放浪するついでに与えたのだ。もちろん、影は総隊長不在で少しばかり混乱したわけだが・・・

「まあまあ、そう文句言つなよ。

こつちだつてそれなりの事情があつて呼び付けたんだ。

俺達の息子がクローン人間として存在している可能性があるからな

「・・・風野博士の研究が使われたのか？」

脩三の問いに夢乃は俯いた。

細胞バンクが義臣と夢乃の子供の細胞を手に入れるチャンスは一度だけ。

八年前、流産した男の子がどのように処分されたかなど知りたくない。

しかし、細胞バンクにとつては絶好の研究材料になつたのだろう、容易にその子の細胞を手に入れ、あとはクローン人間を造るだけとなつた。

「ああ、陽子の様子からも間違いなく風野博士が研究していた人間兵器として造られたクローンだ。」

だが、その暴走は快に止められる

部屋の中にいた全員が驚きを隠せない。いくらこの内容を伝えなくとも、自分の弟を始末しろといつているのだ。

「苛酷な任務だとは分かってる。だが、あいつに任せるとしかない」

重い決断だった。

何があつてもTEAMに降り注ぐ災厄を振り払うのが社長の務め。それが八年前の自分の失態を実の息子に拭わせることになつてもだ。

「今回の任務、やっぱり快には荷が重過ぎると思つわ

夢乃の言つことは正論だつた。

TEAMは殺しを認めない掃除屋であるが、その精神を貫くことと自分の身を守ることの狭間に高校生バスター達は置かれるのである。

しかも気にしていたであら、生まれるばっただった弟を始末させようといつのだから・・・・・

「夢乃、俺は全てが終わった後、快に伝えるつもりだ。クローンのことも細胞バンクのことも、そして風野博士の研究がどのようなものだったのかもな

夢乃の表情が曇る。

快は強い子に育つてはくれた。

しかし、まだ高校一年生だ。

本当に全てを受け入れられるか心配ではある。

「快に全てを話してあげなくちゃだめなの?」

「いつかはたどり着く真実だ。

それにはあいつはわかつてくれるからな

義臣は夢乃の手に自分の手を重ねた。しかし、それでも夢乃は不安だった。今まで築き上げて来た平和が、一瞬のうちに消える気がしたからだ。

「あいつは全て乗り越えてくれるよ。

それに奇跡が起ころる可能性がありそうだしな」

義臣は微笑んだ。

そしてもう一つの問題がTEAMの食堂で起きていた。

「龍一、十三年ぶりに帰つて来たんだから少しじぶらに話す」ともあるだろ?」

チームメイトの事とか剣道の調子とか、咲ちゃんどびーまでの関係になつたとか

「ウルセHー! 十三年もおふくろひいたらかしこして親父づらすんなー!」

周囲にいた社員達が一人に注目する。

龍一のことは最も。

普通ならここで殴るかうなだれるかが父親の定番なんだろうが、

「スマン! 確かに母さんはいい女なんだが、俺は遺跡の誘惑に弱くてな。

おもいっきり浮氣していた!」

軽く謝り、理由まで分かりやすく答える父親が果たしてこの世に何人いるだろ?」

「ふざけんなーー。」

「ふざけてなーー。俺は嘗てやったいこととは本気だ」

威圧した。龍一が何も言ひ返せないほどの霸氣で。

「・・・・龍一、影にこなならこつか分かるときが来る。

今回の任務、お前が考へてるほど甘くはないぞ」

そして龍一はすつと立ち上がると、

「全員に伝えておぐ。

俺はこれよりTEAMの戦闘指揮官となる。

今回の案件、心してかかれ」

TEAM全体が引き締まつた。

## 第一一十六話・小さな笑み

戦闘指揮官と言えば快達の表のチームと影を統括し任務に当たる隊長のこと。

分かりやすく言えば、TEAMの上から二番目のポジションだ。

「す、じいね、龍一おじ様。

いきなり戦闘指揮官になっちゃうんだもん！」

無邪気に笑う翡翠とは対称的に、

快はこの人事に間違いなく説教をするはずの人物の事を考えて重くなつっていた。

「鬼の副社長が戻つて来たら何と言つか……」

義臣の暴走を止められる副社長は数ヶ月間不在である。しかし、TEAMのピンチは伝わっているはずだ。戻つて来ても良さそうな気もするが、

「大丈夫だよ、快。龍一おじ様は凄腕のバスターなんだもん。さつきだつて皆の士気が一気に高まつてたじやない」

翡翠の言う通り、あの威圧感と戦闘能力は戦闘指揮官になつても不思議ではなかつた。

「ああ。まあ、そなだりつがやつぱり腕に落ちない点がいくつかあるんだ。

細胞バンクの任務は親父達が出るまでの案件になつてゐる。

だが当人達は先発隊にも本隊にもならない。援軍にしちゃ強すぎ

る  
確かにそうだね

二人の話に紫織が書類をもって入って來た。

「快、社長から今度のチーム編成と援軍リストを預かって來たわ。作戦決行は明日の正午になつた」

二人は驚きを隠せなかつた。

快は急いでリストに目を通す。

「・・・・・紫織、お前が援軍か

「ええ、残り三名は治療兵の編成ね。

戦力の増強は期待しないでちょうどいい」

ありえない事だつた。

しかもその三人の治療兵は全員下つ端。

戦闘スキルはほとんどない。

「なるほど、これで確定したな」

快は珍しく冷や汗をかいだ。

「今回の任務、俺達が捨駒だ」

「捨駒つておじ様はそんなことしないよー!」

「快、私もそう思つわ。

きっと私達にも言えない重大な事があるのよ」

翡翠と紫織は否定するが、

しかし、親子だからこそその考えを理解してしまつ。

「ああ、俺もそう思いたいが、どうも今回の親父はおかしい。  
それを信じる方が難しい状況ばかりなんだよ  
「だけど信じなくちゃ」

翡翠が真つすぐな目をして快と向き合ひ。

「社長の命令は絶対なんですよ。  
快だって隊長なんだからそれぐらい理解してるのはずじゃない。  
もちろん咲ちゃんの事もあったし、私達に話してくれないことも  
多い。  
だけど、最後はいつも裏切らないじゃない。  
快は知ってるでしょう?」「

とびきりの笑顔には敵わない。  
紫織の小さな笑みが快の心を表していた。

## 第一一十七話・先発隊の実力

緑に囲まれた細胞バンク。

いかにも研究所という造りの建設物の数々。

そこが今から血の海へと変わつていくのである。

「さあ、久しぶりの先発隊だ」

白真は楽しそうに肩を回した。

先発隊は好き勝手に破壊できる特権を「えらべていい訳でもないが、

それと同様の事は出来るわけではある。

「隊長、あまり油断するなよ。

今回は治療兵までが先発隊に入れられてるんだ。

何があつても無茶はやるな」

翔は白真に告げる。

今回の先発隊は白真が隊長であり、

その下に翔、大地、翡翠がついている。

決して弱くもなく、実に安定の取れたチームではあるが、白真を除く三人は多少警戒していた。

「大丈夫！ 翡翠は無理させないって！

攻撃補助が任務なんだし、

怪我させたら快ちゃんに何て言わることか・・・」

ぞつとするという感覚はさすがの白真にもあるらしい。

しかし、それを聞いて何も理解してないのが翡翠らしい。

彼女の頭の中では、治療兵が怪我をしてはいけないといつ使命からだとしか思考が働いていない。

「まあ、行こうか。

大地、翔、先制攻撃の準備は？」

白真の問いに一人はニッとして、

「すでに完了だ」

その瞬間、地面が崩れ、さらに突風が木々を倒していく！  
大地と翔の魔法だ。

「さらりに追加だ」

召喚剣士である白真は風に火を乗せ火災を起こす。

「あ～やり過ぎたかな」

やれやれという表情を白真は浮かべるが、

「問題なさそうだ。敵さんもやっぱり立派な掃除屋みたいだし」

周りにはいかにもベテランのバスター達がズラリと四人を取り囲んでいた。

「TEAMと聞いていたが、どうやら篠原義臣が直々に動いてるわけではなさそうだな」

決してなめられているわけではない。

長年の経験がそう告げさせていることも分かる。しかし、その考えが隙を生む。

「ねえ、やっぱり社長って予知能力者なのかな」

翡翠の表情はすぐ嬉しそうだった。

取り囮まれたというのはピンチの一つでもあるのだが、それすら上回る喜びがここにある。

「間違いない。翡翠、頼む！」

「うん！ ヒートーー！」

そして起じる三人の少年の電光石火！

いつも以上の力を体の負担にならないように引き出す翡翠の攻撃  
補助の魔法。

義臣が彼女を先発隊に入れたのはそのためだ。

「TEAMつてのは篠原義臣が組織してんだ。  
お前ら程度の力で勝てるわけがないだろ！」

わずか一分で戦闘は終わっていた。

## 第一十八話・迷子発生

TEAM本社。

山岡優奈は今頃細胞バンクで戦っているであつて、恋人の大地や同級生達の事を思い浮かべながら、

別の任務に出立するところであつた。

掃除屋という家業上、他の依頼も無視できないのである。

「優奈、あいつらが気になつてるようだな」

「氷堂さん」

後ろを振り返れば、隊長の氷堂仁<sup>仁</sup>が立つていた。

「ええ、さすがに不安です。もちろん、信じてはいますけど」

ポニー<sup>ニ</sup>テールがさらさらと揺れる。

「そうだな。だが、こっちも気は抜けないんだ。

さつさと終わらせた場合、別の任務に当たる予定だからな

仁の口元が少し吊り上がつた。

そして同時刻、快のチームが戦火上がる細胞バンクを見下ろしていた。

「快！ 早く突入させやがれ！」

「まだだ！ 白達が戦線離脱しないだろ？ 」

お前本当に影に所属してんのかよ！」

快のツツ「ミミはもつとも。

冷静なのは修と陽子のみである。

とはいえ、陽子も反旗を翻した立場に立っているため、若干の余裕はないようにも見える。

「まったく・・・もう一度作戦を説明するぞ。

今回は俺と陽子はクローンの破壊、そして修と龍一は各重要人物と交戦。

まずくなつたら即時に戦線を離脱すること。特に龍一、深追いするな」

釘を刺すあたりはさすがは快といつていい。

任務成功率を上げるためには小さな事ほど逃さない。

「分かってるよ。それよかあいつらが出て来るのも遅くねえか?」

龍一の問いに修は冷静に考え出す。

「細胞バンクつて迷路みたいな構造だよな

「ええ、由や翔は方向感覚完璧だけど、翡翠と大地は平気なのかしら・・・」

言われてみて気付く事実はある。

おそらく天然迷子と地図を覚えてない奴が一名・・・

「今すぐ行くぞ! 突撃だ!」

本隊のはずなのに先発隊の援軍として快チームは任務を開始することになった。

そして、その予想は見事に当たつている。

「……はどこだ……」

大地は見事に迷っていた。

とはいって、天井さえ壊せば何とかなるため、そこまでの危機感はない。

「白達が第四研究所の細胞を回収してるのはずだから、俺はその隣の第三辺りにいるはずだよな」

その曖昧さが非常に危ない。

しかし、何度も襲撃にかすり傷一つも負つてないのは幸いである。

「とりあえず、あの辺の部屋にでも入つてみるか」「それは困る。大切な臓器が保管されているのでね」

大地は声のする方に振り返つた。

## 第二十九話・勝率

「切り裂き魔？　あの最近噂になつてゐる？」

先発隊出立前、快は今回の重要な人達の写真を高校生バスター達に見せた。

「ああ、名前は岩崎政一。元軍医で人体実験を行つていた第一任者だ。

その腕を買われて細胞バンクに入つたらしいが、掃除屋界では切り裂き魔として有名だ。

先発隊はもしこいつと遭遇した場合、

出来るかぎり逃亡を第一とする」

「ええ～つ！　敵前逃亡なんて剣士の道に反するよー。」

白真はおもいつきり駄々をこねるが、

「先発隊だろ。少しぐらい我慢しろよ」

「いや！　いいえ、言つことききます・・・」

快の殺氣にあてられ、白真は大人しくなるのだった。

「で、俺はどう逃げたらしいのかね。

こここの破壊も任務のうちなんだが・・・」

大地は考える。一応、実力の差は多少ありそうだが、闘つて勝つ確率は六十パーセントはありそうだ。

「いいねえ、君は健康そうだね」

「そりやコツクだからな。栄養バランスとれた食生活はしてるんで」

サラリと大地は答える。

「そうかい、それは私のコレクションに是非とも加えたいね、橘大地君」

「へえ、俺も結構有名人なのかな？」

大地は少し嬉しそうな表情を浮かべた。

「一応ね。君のお父さんはかなりの有名人だったから調べておいたんだよ」

「さいですか」

何かとあれば出て来るのが父親である。

致し方ない」とと言えば納得するしかなくなるのだが。

「だから興味を持つてね。

橘太陽の息子ならかなりいい実験材料になりそうだ」

「・・・俺は調理の具材かよ」

「医者にとつてはな！！」

岩崎は襲い掛かつて來た！

「土壁！..」

自分に直線に向かつて來た切り裂き魔は、  
メスを土壁に突き刺す状態になつた。

「自然系のバスターか」  
「端くれだけだな」  
「確かに」

大地は土壁に亀裂が入り始めたことをすぐに見抜いて高く飛び上がる！

「脆い壁だ」

土壁が簡単に崩された。

「なんかショックだな」

空中で体勢を整え、岩崎から一定の距離をとる。

「ほつ、身のこなしは良いようだな」  
「体育の成績だけはいいんで」

大地は微かに笑った。勝率は半分以下だとようやく気付いたのである。

## 第三十話・ルーレット

勝率半分以下の戦闘に勝つ方法はあると言えばある。

一瞬の隙をついて大どんでん返しを狙うか増援の到着まで粘るかだ。

しかし、橘大地には間違いなく両方の可能性が低い。

「つおつー。」

辛うじて岩崎のメスをよける。

勝率はもはやゼロに近かつた。

体力が少しずつだか失われていくことを大地は感じていた。

「思つてた以上にしぶといね。

新しい研究材料としてはもってこいだ」

「へつ、細胞バンクお抱え医者の実験材料なんて死んでも「ゴメンだ。あんなもの医者として造る手助けなんかするもんじやない」

微かに大地は笑つた。

「ほう、高校生バスターとしてはよく知つているな。

橘太陽からの情報か？」

興味深そうに岩崎は尋ねる。

「いや、俺は昔から情報収集は得意分野なんだ。

社長達が何も教えてくれないなら自分でつかみ取るしかない。

そしてようやくここに来て真実に辿り着けた。

おまえ達は快の「ピー」を作り出したんじやない。

快の弟を作り出したんだる、しかもれつきとした人間をな！」

岩崎がにんまりと笑った。

まさに大地の言つたとおりだつた。

「素晴らしい！」に侵入してそれだけの情報を集めていたか！  
一体どんな能力を持っているんだい？」

歓喜きわまりなく岩崎は叫ぶ。

侵入した場所に入つただけで情報を掴む能力など滅多にない。

「簡単だ。呼吸をしているものから情報を得てるだけだ。

ただし、自分より明らかに強いものからは感じ取ることが出来ないが

「なるほど、だから私の弱点は聞き取れないわけか

「いや、それも違う」

大地はスッと腕をあげた。

「俺の直感は勝率二十パーセントとなつてゐる。

どんどん返しを狙うのも得意じゃない。

だが、俺には運の良さつていうものがある。

生まれてこのかた、俺は大吉しか引いたことがないんだ」

快辺りがいれば運の無駄遣いと言つだらう。

「そうか、だが幸薄い人生だつたようだ」

「それも違う。俺には出来過ぎた彼女がいるし、料理の腕もこの歳で厨房に立てるぐらいだ。充分幸運なんだよ。だから今回も運に任せてみようと思つてね」

大地はニッと笑うと、一気に力を上げた。  
そして地面にルーレット版が映し出される。

「全ては運次第。命懸けのルーレットだ。  
負ければその場で命を絶たれる召喚術だ。  
俺の運とあんたの運、どっちが強いかね」

大博打の始まりだった。

## 第三十一話・動き出したチーム本隊

死神などといふものは一応この世に存在している。  
ただ、掃除屋界のなかでと修正しておるべきだ。

「・・・・いいゲームだね。

私も今まで何度も命の危機に曝されたが、  
ここまで命懸けで向かってくるものはいなかつたよ。しかも運任せでね

岩崎はほくそ笑んだ。

そして大地も笑みを浮かべる。

「俺もだ。何度もこいつを使つたことはあつたが、  
ここまで恐怖にかられたことはない。

勝率百パーセントじゃなければ使つちゃいけない禁術だからな」

「人殺しの召喚だからか？」

「ああ、力の加減は出来そうにならないことも明白だからな」

大地は汗が背中を伝つていくことを感じていた。  
いつも以上の緊張から来る事だけは分かっていた。

「だが、今回ばかりは綺麗事すら言えない。勘弁してくれよ」

話はそこまでだった。

死のルーレットは回り始める。

一秒、一回転が互の心臓に悪影響を与えていた。

そして針は止まった。

「・・・・勝ちだ」

「へへっ、俺の負けかよ」

大地は笑った。そしてルーレットは消え、死神が大地に向かって  
くる。

「残す言葉を言え」

死神は大地にたずねる。

「普通なら礼を述べたり、愛しいものに何か伝えるべきだが、  
俺の願いはただ一つ。あいつを倒してくれ」

「承知した」

そして死神は岩崎の方を向く。

「主人の最後の願い、お前の命も頂こう」  
「何つ！」

一瞬で岩崎の胸は貫かれる。  
さらに大地の胸も貫かれた。

「馬鹿な・・・・！」

「相打ちだ、馬鹿野郎・・・・」

二人の意識はそこで絶たれた・・・・

その同時刻、義臣のチームが動き出す。

「長かつたな、ここまで」

義臣はそう呟く。

言わんとしていることは分かる。

「ええ、翡翠ちゃんを預かって十六年も経つんだもの。  
だけど、ようやく一人を会わせてあげられる」

夢乃はニコッと笑つた。

それは今回義臣達がもつとも重要視していたことを表していた。

「ああ。だが、この任務をしきじればまた掃除屋界は大荒れだ。  
おそらく予想以上の妨害に遭つだらうが、必ず助け出せ。あいつ  
をな」

義臣達の任務が始まった。

義臣のチームが動き出した頃、迷子になっていた翡翠も大ピンチを迎えていた。しかし、やはり治療兵なのか、攻撃を避けるだけ避けていたためにかすり傷すら負つてない。

「しぶとい小娘だ。さつさと我々の研究材料になれ！」

「絶対嫌よ！」

翡翠を追いかけているのは細胞バンクの医療兵だった。主に細胞バンクの研究材料をかき集めることが仕事だが、緊急時には戦闘のスペシャリストとして戦う。だが、やはりTEAMのメンバーの細胞は喉から手が出るほど欲しいのか、

私情を絡めた戦闘が繰り広げられている訳である。

「とにかく外に出なくちゃー！」

逃亡「する」ことが治療兵にとつては第一任務になる。しかし、翡翠の天然迷子ぶりは普通ではなかつた。よりによつて、今回快達のチームが破壊を目的としていたクローン技術の核に来ていたのである。

「まぢい！ 攻撃をやめろー！」

医療兵達は一斉に攻撃を止めた。

中にあるのは自分達の宝だ。

一応、それなりの耐震技術等は備わつてゐるが、

リスクを負うつもりもない。

「！」の中から逃げられるかも…。」

翡翠はロックのかかつたドアをおもこつきり吹き飛ばす。そして上に出るために屋根を破壊しようとしたが、飛び込んで来た光景に翡翠は愕然とした。

医術に携わるものなら何があつてもやつてはいけないことがある。

「やめてくれ！ 僕を殺してくれ…。」

「いやあ！ 私の手足を返して…。」

「怖いよお…。」

翡翠は幼き少年の元に走った！

今にもそのからだがバラバラにされそうだったのである…。

「危ない！ 気功！…。」

切断機が破壊されるが、その隙が命取りだった。

翡翠の背中が撃たれていたのである。

「せつかくの材料を無駄にしないでくれないか？

そいつは稀血の持ち主でね、怪物を作るには必要なんだよ」

しつと詰り医療兵に、翡翠はブチ切れた。

「細胞再生」

撃たれた背中が一瞬のうちに綺麗になる。

「なつ！ 馬鹿な！！」

「馬鹿はあんた達よ！ 医術に携わるものなら何があつても人体実験はやってはならない禁忌！」

あんた達には生き地獄を見せてやる！」

そして一瞬だつた。

翡翠は追いかけて来た医療兵達の腕に軽く触れた途端、

医療兵達の筋肉はずたずたに切り剥かれた。

「しばらく倒れてなさい！」

翡翠はこれでも加減していくのである。

泣いていた少年に翡翠は近づく。  
幼い少年はとてもかわいらしく、ギュッと抱きしめてやりたい気持ちになつた。

だが、気付いたことがある。

「ねえ、君の名前は？」

「僕？ 僕はSHIZU」

SHIZUはニッコリ微笑んだ。

翡翠ははつとした。

「快・・・・

「その通りよ。その子は社長と夢乃さんの子供、そして快の弟」

翡翠は後ろから聞こえた声に安堵した。

「陽子ちゃん、脅かさないでよ」

少々翡翠は涙田になつたが、  
さりに混乱に陥ることになる。

「翡翠、死にたくなければその子を見たことを快には言わないで」

恐るべき殺氣を陽子は一人に叩き付ける。

「どうして？ 陽子ちゃん？」

翡翠はSHINEを庇つた。SHINEも陽子に怯えてこる。

「翡翠、どきなさい！ その子は造られた快の弟なのよー。ここで教育されれば間違いなくTEAMの災厄になるー。それに快にその子を見せたらどれだけあいつが傷つくと思つてゐのー！」

「造られていても人間なんでしょ！ だつたら私はどかない！ 絶対に守るー！」

治療兵として、人としてどくわけにはいかなかつた。何がなんでも守らなければならないと思つたのだ。

「だつたらー！」

陽子は翡翠に斬り掛かる！  
だが、それを止めた人物は現れた。

「まさかお前が裏切るなんて思わなかつた、陽子ー！」

修は冷たい目を向けた。

それは初めて仲間に向けられたものだつた。

「覚悟しろよ。俺は仲間でも、

裏切りを許すお人よしじやないんだ」

「修ちゃん！ 違つよー。陽子ちゃんはー！」

翡翠は必死に陽子を庇おうとしたが、もはや二人にかける言葉もなかつた。

「修、やつぱり社長から私は疑われていたのね。

私がSHINEを破壊しようとしていたことが洩れていたとは思つてたけど」

陽子は悲しい笑みを浮かべた。

「ああ、細胞バンクの情報はしつかり盗ませてもらつた。

この子が八年前、社長夫妻の子供として生まれてくるはずだった子供となんだろ?」

「えつ・・・・・!」

翡翠は混乱した。生まれてくるはずだった子が、どうして少年として成長しているのか、そしてなぜこんなところにいるというのだろうか?

「その通りよ。八年前に死亡した退治の細胞と快の遺伝子情報を組み合わせてその子は完成した。

だけどここにこの科学者達はさらなる力を求めた。

翡翠も見たでしょう? 人体実験をしている馬鹿達」

周りの視線は未だに翡翠達を見ていた。  
さつきまで殺されそうになつていた人々。  
そして自分の足元に倒れている医療兵達。

「こいつらはあの人達を使ってSHINEに取り込んだ力がある。  
修、ここから先は影の管轄よ。

あなたは翡翠を連れて戦線離脱しなさい。邪魔はさせない!」

陽子は力を解放した。



お互いのことが好きだと分かったのは、おもらく小学五年生の時。彼氏と彼女。冷静な修でさえ少しほにかむような気持ちを持った。しかし、そんな二人は今から命を賭けて闘つのだ。

「やめてよ！ 修ちゃん！ 陽子ちゃん！…」

翡翠は激突する二人の間に入りたいが、

あまりのレベルの高さに止める術を見出だせなかつた。

「その通りね。SHINEをえ殺せば私達は戦わなくてすむのこ

「TEAMは殺しが禁止だ。

影でもそれは変わらないだらう？」

冷静な口調が激しい闘いと対比している。  
そして、陽子は一旦修と距離をとる。

「やつぱり、修を相手に普通の剣、じゃ意味がないわね。

修、これが最後よ。SHINEの危険性は十分理解してゐるわよね？  
造られた人間がコントロールされた場合、  
特に社長の実の子供であるSHINEが敵に回ればいくらなんでも  
TEAMに隙が出来る。

だからこそ影がいるのよ。

TEAMを守るためにリスクファクターを消す任務を遂行するため

悲しい瞳が修に向けられる。

「それはあくまでもこの戦いに負けたSHIONを奪われたときの話だ。

お前だってTEAMの一員なら社長達の強さも分かってるはずだ。それでもSHIONを消さなければならぬ理由があるのか？」

修は陽子に尋ねる。お前は殺しなどしたくはないのだろ？

「そうね、私も今回の勝利は信じている。  
もちろん社長の強さだって分かってる。  
だけど、この戦いの背後に隠された事実があるの。  
その鍵となるSHIONを消しておかなくちゃ掃除屋界そのものの  
存亡に関わる！  
だから邪魔はさせない！」

「あつ……！」

翡翠の田に映ったのは赤い死神の鎌。  
陽子の最も得意とする戦術、遠近距離戦。

「赤月。久しぶりに見たよ」

「そうね。だけどこれでおしまい。死んでもうつむかー。」

重量にして一トンはあるだらう赤月を、陽子は軽々と奮い立つ。

「翡翠ー！」

「うんー！」

翡翠はSHIONを抱えて陽子が繰り出した攻撃の直線から離れる。

「厄介なもん出しあがつてー。」

修の後ろに出来た床がえぐられた痕が、その破壊力を物語つている。

「まだまだ！」

「させるか！ 水壁！」

水の壁が陽子の斬撃距離を縮める。

少しでも翡翠達から陽子を遠ざけるようにしながら、陽子を気絶させる方法を考えていた。出来るなら傷つけたくない。

「修、影を甘く見ないで頂戴」

「なつ！」

首筋に赤月の刃が突き付けられる。

「快や翔だつたら見破つてたでしうね。赤月の持つ能力はなにも物理攻撃だけじゃない。幻覚を見せ、相手の隙を突くことも出来る。修、これで最後の警告よ。翡翠を連れてここから消えなさい！ 邪魔をするならすぐに首を落とす！」  
「出来る訳無いだろ！」

入口から一人の少年が入ってくる。

「・・・遅えよ、快」

陽子は強い霸気に動けなくなるのだった。

第三十四話・赤月（後書き）

すみません！ よつやく再開です！ またよろしくお願ひします

（ ） 三

その場にいたものは呆然と立ち尽くす。  
こんなところで快が出て来るなどと予測していたのは、修だけだ  
った。

「全員無事か?」

「一応な」

修は苦笑いを浮かべる。

情けないことに、本気の陽子相手に力を制御できるほど修に余裕  
はなかつたのだ。

「陽子、SHINを殺す必要はない。

SHINは間違いなく人間だ」

「だけど…」

快は陽子の頬を打つ。

女の顔を平手打ちにしたのは初めてだつた。

「お前が人殺しになつてどうするんだよ！

何が起ころうとTEAMは負けたりしない！」

確かにお前の言つ通り、SHINは人間兵器として扱われた場合  
にはTEAMの災厄になる。

当然これからSHINを狙う奴も出て来る。

だけどな！ それでも俺の弟なんだよ！

いくら仲間でもSHINに危害を加える奴には容赦しない…！」

快は本気だつた。

陽子もこの展開を予測していた。

だからこそ会わせたくなかったのだ。

「快、社長からの任務は細胞バンクの破壊とクローンの消去よね？」  
「ああ、表向きはな」

陽子はハツとした。

「俺達の本当の任務は、陽子がSHINEを殺さなければならぬ状況に追い込んだ奴らのあぶり出しと始末だ。  
だからあえてお前を一日フリーにした。  
まつ、翡翠がここに迷い込んだのは想定外だつたが」

呆れた顔をしながら快は翡翠を見た。

「そしてお前と修が闘えば必ず漁夫の利を狙つてくる奴は来る。  
だよな、TEAMの裏切り者」

快が見据えた場所から一人の女が現れる。

「香！」

「あらあら、さすがは社長の息子ね。  
いつから気付いていたのかしら？」

白衣を着た女が、陽子の兄達を殺した女がすっと姿を現した。

「最初からだ。とはいっても、あんたの思惑程度なら親父が全て見抜いていたさ。

もちろん、それで犠牲になつた陽子の兄さん達には申し訳なかつたが」

「えつ？」

陽子は何のことなんだか分からなかつた。

三年前、自分達に下つた任務は細胞バンクの調査とデータ回収だつたはずだ。

香の裏切りも予測していたといふのか。

「そう。だつたら今頃、社長達は私達のアジトに侵入してゐる頃かしら。

だけどさすがの篠原義臣でも殺されるかもね。

相手が相手なんですもの」

香は笑つた。

それに答えるよつに快も笑う。

「ああ、確かにまづいかもな。

だが、出来損ないのクローンなんかに親父は負けたりしないさ。あんなでも最強といわれてるんだ。

何より、TEAMにいたなら記憶しておけよ？  
敵にまわす馬鹿はやるなつてな！」

快は力を解放した。

## 第三十六話・弔い合戦

「陽子！　翡翠！」

修は一人を抱えると一瞬のうちにその場から消えた。

「あらあら、残つたのは隊長さんだけ？」

「ああ、弔い合戦は隊長が出張れば充分だ」

快は魔法の弾を浮かせる。

召喚系の快にとつては珍しい戦い方だ。

「そう言わないでよ。

仕方なかつたのよ、哲達を殺すことになつたのも。  
細胞バンクの秘密を調査しようなんとするから」「人間兵器を作るなんて禁忌を犯したからだろうが。  
掃除屋として見過ごすわけにはいかないんだよ！」

霸気が香に叩き付けられる。

ビリビリ来る感覚に香は多少の快感を覚えていた。

「ふふつ、さすがは解析できぬ細胞の持ち主ね。  
風野博士の研究結果は見事に出てるわけか」

「研究結果？　何のことだ？」

いきなり実験体扱いされ快は少々不機嫌になつた。

「あら？　優しい社長は何も伝えてないの？」

あなたは確かに篠原義臣の息子だけど、

あなたもSHANEと同じように様々な細胞が組み込まれてこる。夢乃さんを溺愛してるのは優秀な人間兵器を作る母体だから。まつ、私達以上に篠原義臣は策略家なんでしょうね」

快は静かになつた。

さすがにショックを受けたのだと香は思った。

「それは事実なのか？」

「ええ、あなたが一番よく知つてゐるはずでしょ？」「自分の出来の良さを考えたらね」

「そりが・・・あの親父なら確かにやりそりだな。だが――」

無数の魔法弾が香に襲い掛かる！

「母さんを実験台に使つたんだつたら、例えどんな理由があつてあの親父を消す！」

向けられる矛先が明らかに違うのではないかと、冷静な者がいたらつっこんでいたはずだ。しかし、今の快に何を言つても無駄だらう。

「なるほど、やつぱり考えて戦つてるわね。これじゃあ、あなたに近づけない」

魔法弾をよけながら香は心の中で舌打ちした。

香は近距離戦タイプだ。

一発快に当てることが出来れば、間違いなく快に致命傷を負わせることが出来る。

「だけど、それ以上の策はないのかしら？」

「ある

それは一瞬だった。香の後ろに快はいたのである。

「雷光」

「いやあああ！…」

香は感電した。そして途切れていく意識の中、最後の力を振り絞つて快に言う。

「ふふ、さすがね…」

「…どうして避けなかつた？ 元・影にいたあんたが今を避けられないわけはないと思つたが」

「ええ、あの程度ならね。だけど、私も見捨てられたのかしら…」

・

香は意識を失つた。そしてその言葉の意味はすぐに分かる。

「ご苦労だつた、私のクローン。

作り出した甲斐があつたみたいだ

「なつ！…」

現れた人物に快は絶望した。

## 第三十六話・弔い合戦（後書き）

本当に更新遅くなつてすみませんでした！ また頑張つて書いていきます

信じたくないことはこの世には沢山転がっている。

快の目の前に現れたものも否定できるならすぐに否定したい。  
まさか自分の父親達がずっと助けたがっていた翡翠の父親が香を殺したのだから……

「久しぶりだね、快君。

私がTEAMを離れてから十数年にのぼるから君に記憶など

「あります。物心は三歳の時には付いてますから」

快はサラッと答えた。それは動搖を隠すため。

「そうか、私が思ってた以上に優秀だったか。やはり義臣の遺伝子はかなりのレア物というわけか」

風野博士は笑った。それは科学者としての喜びに満ち溢れていた。

「さて、快君。君に頼みたいことがあるんだが聞いてもらえるかな？」

「聞くだけなら」

嫌な予感がする。義臣が話していた風野博士とのイメージがかなり掛け離れている。

聞いていた話は人のための研究をする科学者。それが風野博士だと聞かされていた。

「なに、簡単なことだよ。君に私の研究材料になつてもらいたい。

もちろん寂しければTEAMの高校生バスターの面々も一緒にね  
「断る！ 一体あなたは何者なんだ！？」

親父はあんたが人を救うために研究を重ねてきたと言つていた。  
だから今回あんたの情報を掴んで助けに向かつたんだ。  
その結果がどうしようもない男だったなんてふざけてるんじゃね  
えよ！」

快が風野博士に突撃していくとしだが、それを止める者達が現  
れた。

「快、お前達高校生バスターはここまでだ。今回は引け」

そこに現れたのは影を率いた瀬野龍一だった。

「まだ任務は終わつてない。俺達の任務は細胞バンクの壊滅と要人  
の始末。  
それに今風野博士が含まれた。この男が今回の首謀者なんだろう  
！？」

「そうだ。だからお前達は引くんだ。  
風野博士に一対一で勝てる相手などこの世にはいないからな。だ  
から義臣が来るまで俺達が食い止める」

足手まといとこつ現実が目の前にある。

戦場を離れてなお自分より強い龍一がそう言つならば命令には従  
うべきだ。

だが、快は逆らつた。

「親父が来るまでどれだけかかるんだよ  
「さあな。だが、5分は稼ぐ自信はあるな  
「だったら行けない。心配しなくても足手まといにはならない。

ただ、5分後のこととは全て親父にかける。それなら問題ないか？」

快は一気に力を上げる。間違いなく自分の力のコモリターをはずすつもりだ。

「・・・それなら5分30秒はもつが、期末は諦めるか？」

龍一はニッとした。

「ああ、一日で全てやるから心配しなくていいよ。

龍一と違つてすでに範囲全てを学習済みだ」

そして空氣は変わる。

激突寸前のたわいのない会話だった。

第二十七話・風野博士（後書き）

放置プレイしてすみませんでしたっ！！

連載再開です

## 第三十八話・時間を碎く拳

リミッターをはずすこと。

スターにとつては一番戦いたくない相手であり、自身にとつては確実にしつペ返しをくつ特攻そのもの。

だが、やらなければならぬときがある。

誰かを守るために、自分が動いてしまうから不思議だ。

「さて、俺も実践は久しぶりだからな」

龍一は屈伸運動をし始める。

間違いなく彼自身も全力を出し切るつもりだ。

「おじさん、俺達は親父に反発してばかりだけじゃ、多分龍一が一番素直だと思う」

「そうか。まあ、俺達は息子をほつたらかしにしてばかりだからな。だが、快君達のおかげだろうな、あいつはちゃんとまつすぐに育つてくれた。ありがたいことだ」

龍一は笑みを零した。本当に心からそう思つたからだ。

「だったら俺も礼をいつておきます。

あいつを家に置いてくれて嬉しかった

「そうかい

それが最後だった。

その場にいた者達は一斉に風野博士に殴り掛かった！

「まずは四人」

霸気が快と龍一以外の四人に襲い掛かり戦闘不能となる。その時  
間僅か三秒。

# ふざけた力だ

君ほじではないよ、瀬野龍一

たつた一秒で龍一の後ろに風野博士はついていた。

「...」

強烈な蹴りが龍一を襲うが、やはり元・影の総隊長の実力は半端ではなかつた。

しつかりと足を掴んでいたのだ。

「快！  
いけつ！  
神龍！！」

神々しい龍神は風野博士に襲い掛かるが、それを片手で止める男  
がいたのだ。

「危ないな。神龍は義臣じゃないと使いこなせないものだ。  
さすがに暴走したら私も疲れてしまうからね。消えてもらいうよ」

そして弾ける・・・・

「ばかな！！」

「油断するなよ、義臣の遺伝子は継いでるんだから？」

またに一瞬の影分身。その分身の強烈な蹴りを快は背中に受ける。

「ガハッ！！」

「快！」

龍一は駆け寄ろうとしたが風野博士はそれをさせない。

「近付かせたりはしないよ。時空系の力を壊す力の持ち主なんて普通はあつてはならない存在だからね」

「ほざくな！ お前の方がよっぽどあつてはならない科学者だらう！」俺達を散々弄びやがつて！」

龍一は快の前に立ち塞がる風野博士に再度躍りかかる。

「砕ける！」

「させない」

それは時間の狭間での戦い。

相手の時間を壊す龍一の乱打が風野博士に襲い掛かるが、

「……やはり弱くなつたようだ。

あの時、美咲が殺された時の君に戻つてさえくれば少しは私も戦えただろうに」

「……！ お前がどうしてそれを知つている……」

拳が止められ、風野博士は答えた。

「私が殺したからだ。それ以外思い付くかい？」

そして貫かれる胸。しかし、その痛みを龍一は感じなかつた。

激怒と共に龍一はその場に膝をおりすべてを解放する。

「ようやくすべてが繋がったよ。

風野博士、あんたをこの世から消し去る

そして話は激動と言られた過去に戻る。

それはまだ快達が生まれて間もない頃、細胞バンクがまだ設立された頃の話へ・・・・

## 第三十九話・霧澤美咲

霧澤美咲、かつてTEAMに所属していた義臣達の幼なじみ。その彼女は確かに存在していて、死んでいた・・・

「美咲ちゃん、美咲ちゃん」

「・・・夢乃」

眠り眼を擦りながら美咲は意識を現実に向けていく。

「おはよー、珍しいね、美咲ちゃんがお昼寝してるなんて」

夢乃はふんわり笑う。風通しのよい篠原邸の裏庭は絶好の昼寝スポットだ。

「たまにはね。それより、また快君大きくなつたんじゃない？  
ついこの前までヨチヨチ歩きしてたのに」

「そうなのよ、どうも発育が早いみたいね。この前も風野博士に検査してもらつたんだけど、普通の子よりIQレベルも高いみたい。細胞操作の実験を私達夫婦でやりたいと言われたときには驚いたけど、

「こんなに健やかに育つてくれたならうれしいこと無いな」

「確かにね、どこの子も皆元気ならなにより」

美咲は少しだけ悲しそうな表情を浮かべた。彼女にも一人女の子がいる。

しかし、その子は今、美咲の傍から離されているのだ。その話はおじおい語られることになる。

「美咲ちゃん、大丈夫。すぐに会えるよ」

夢乃が言つならそうなんだろうと美咲はそう思える。彼女は綺麗に笑つた。

「美咲」

「龍一」

美咲は当時影の総隊長の任についていた瀬野龍一が現れたと同時に、凜とした表情を浮かべた。

「義臣からの召集命令だ。すぐに出るぞ」「分かった」

美咲は瞬時にその場所から消える。

その直後風野博士は現れた。

「夢乃君」

「風野博士、あの一人が呼び出されるなんてただ事ではないようですね」

美咲はTEAMの中でもかなりの使い手だ。彼女と龍一が組まなければならぬほどの任務となれば危険を伴うもの。

「ああ、一人には申し訳ないが、私の細胞バンクに接触してくる届きものを懲らしめてもらうことになった。

組織の名は『ブレイブ』、冰堂が作り上げた無法者集団だ」

それを聞いて夢乃は飛び出そうとしたが、風野博士はそれを止め

た。

「医療兵が今回の前線に出てはならない。

色鳥透士が不在の中で君が負傷してもうりつては困る

「だけど……」

「私がここに来たのは彼等と戦つため。大丈夫、科学の面においてはTEAM一番ではあるからね」

それだけ言い残して風野博士は消えていった。

そして社長室に、TEAMの三小隊が集められていた。

「およそのことは聞いてるな。

ブランドに風野博士が掃除屋界のために作り上げた研究品の数々のデータが流出する事態が起こった。

悪用される危険性が高いものもある。 そうなる前に奴らを始末し

る

いつも以上に張り詰めた空気。 事態は最悪の時間へと突き進み始めた・・・

## 第四十話・闇が現れた日

掃除屋ブラッド。氷堂尊氏が組織するバスター集団。その悪名は掃除屋界の中でもリスクファクターとして轟いていた。

「デビル・アイ、それが今回の一番危険な代物か」

ブラッド本社を目指し龍一、美咲、風野博士の三人は走る。基本は四人小隊だが、後一人は現場で合流する手筈になっていた。簡単に言えば、ブラッドのスパイとして入り込んでいる男がいるのでその人物と合流しどのことだ。

「ああ、氷堂は数年前に義臣に片目を斬られて視力を失ってる。だが、風野博士がクローン技術を用いて義眼を作り上げたんだ。それが利用されようとしてる」

「利用ならまだいい。私の義眼がデビル・アイなどといい名前に出来る技術者達がブラッド内にはいる。

そつちの方がこの先もつとも危険な事態だ」「確かにな」

科学の危険さを理解しているからこそ、今回は慎重に事を運ばなければならなかつた。

だからこそTEAMの精鋭達が選ばれたのである。

「やはりそいつらも始末しておくべきか」

「いや、優秀な科学者ならば生かしておくべきだ。

ブラッドについているからといって完全に敵だと思い込むのは危険過ぎる。

あの氷堂尊氏なら科学者の一人や一人、脅すことなどなんともな

いだらう

正論だった。相手はスターではなく科学者だ。

氷堂尊氏が利用しようとしているだけの可能性は捨てきれないのである。

「だつたらじうある？ 彼等は殺意を見せれば殺して投降するなら保護しろというのか？」

美咲は龍一に尋ねた。最終判断は隊長が決めるんだ。

「・・・幼い子供だけは殺さず捕獲。他の者は抹殺対象としてかれ。

例え投降しても全ての自由を奪え。何があつても隙を見せるな」

龍一の命に緊張が走る。全ては自分達とTEAMを守るため。甘されは命取りになる。

「了解

「では、一旦ここで別れる。俺は氷堂の抹殺にある。

美咲と風野博士は科学者達と応戦してくれ。絶対に死ぬな！」

「ああ

それ美咲と龍一が交わした最後の言葉だった。

龍一と分かれたあと、裏切り者が牙を向いたのである。

「・・・霧澤美咲か、TEAMの影は優秀な人材が集まると聞いたが、噂以上のサンプルだ」

「博士！！ 下がつてください！！」

美咲は風野博士を後ろに下げる、声がした方に躍りかかつた！

「ちつ！」

声の持ち主は美咲の攻撃を交わしさらに闇へと入り込んでいく。

「博士！ 奴を追います！」

「ダメだ！ 深追いするな！」

しかし美咲はその忠告を聞かず追い掛ける。

「美咲！ 止まれ！」

「止まるわけにはいきません！ 今ここで手掛けりをなくすわけには！」

「伏せろ！ ！」

美咲は風野博士に庇われ地面に伏せた。

「ちつ！ 溶解術か！」

「その通りだ」

闇から現れた男は不気味な笑みを浮かべた。その顔は知っているもの。

「えつ！」

次の瞬間、美咲の血が滴り落ちる。  
胸に刺さった違和感は間違いなく刃物。

「だから追つなど言つたんだ。霧澤美咲

風野博士が正体をさらけ出した瞬間だった。

## 第四十一話・コラッタ解除

「相原哲、僕は相原哲です」

「聞いてる。相原陽平の息子だな」

龍一はすまなかつたと刃を下ろした。

まだ中学生ぐらいの陽子の兄、相原哲と龍一は遭遇していた。この任務でもし保護できるなら保護しようと言っていた少年だ。

「どうする、お前もTEAMに来るか？」

「是非お願ひします」

哲は子供らしい笑みを浮かべた。

「それより龍一さん、片岡航生さんを」存知ですか？」

「ああ、合流する予定があいつがどうした？」

片岡航生は翔の父親だ。今回の任務で合流する予定の男である。哲はすつと一枚のディスクを龍一に渡した。

「これを篠原義臣さんに渡してください。片岡航生さんが掘んだ細胞バンクの実態とブラッヂの関係です。

おそらく風野博士も関与しているとおっしゃつていられました」

「そんなバカな…博士はTEAMを売るような人じゃない」

「ですが、風野博士の研究仲間であつたライ・タナーがいます。可能性はゼロとは限りません」

哲の言つとおりだつた。細胞バンクは風野博士が立ち上げた組織だ。

義臣の信頼を得てTEAMをかくれみのにし、暗躍するにほもつてこいだ。

特に敵対する組織と風野博士が繋がっていることなど疑ひはずもない。

「片岡航生さんは前から博士を疑つていらつしゃいました。おそらく義臣さんの子供を研究対象にしたのも彼の好奇心だけではないのではと」

「言わればかなりの不可解なことがある。だが、風野博士がTEAMに施してくれたのはプラスにしかなつていいない。

「とつあえず、美咲と合流する。  
俺は仲間を信じたいが、もし風野博士が裏切るような真似をすれば…」

影の総隊長としてはTEAMに害をなすものは抹殺しなければならない。

特に今回はブラッドが、氷堂尊氏が絡んでいるのだから：

「哲、お前は兄弟が一人いただろ、一人を連れて早く戦線を離脱しそ」

そして龍一は素早く印を結び哲の腕に刻み込んだ。

「この術式をお前の腕に刻んでおく。  
お前がTEAMに行きたいと念じれば飛ばしてくれる。  
出来るだけ早く離れるんだぞ」

「はい」

そして二人は離れた。

霧澤美咲は巨大ビーカーの水の中で目を醒ました。コポコポと水の音が暗室に広がっていた。

胸の傷が少し塞がつてることとは誰かが治療してくれたということ。

そして彼女の目に自分を刺した張本人がいた。

「は…かせ…？」

朦朧とする意識の中、彼女は言葉を紡いだ。さっきの出来事は敵の幻術だつたのかと思つたが、それを検討違いと思わせる言葉が降り注がれる。

「残念ながら君の命運はここまでだ。

霧澤美咲君、君は私の制止も聞かずにこの研究室にたどり着いてしまつたんだからね」

美咲の周りにはクローン人間や生物の屍が無数あつた。

間違いなく禁忌の実験が行われていたに違いない。

美咲は自分が明らかに研究材料にされていると自覚するのに時間がかからなかつた。影としての彼女の目を風野博士に向ける。

「…違うでしょ、誘い込んだんだ」

美咲は全てが風野博士の思惑だつたと知る。TEAMにいたのはこのため…

「だけど…！ 私一人で事足りるなら早い…」

美咲はソミツターをはずし周囲の研究材料を消し去っていく。

「風野博士、いや、風野秀生！！ TEAMを裏切った罪、その命をもって許そう」

美咲は風野博士に躍りかかった！

## 第四十一話・風野星華

リミッターをはずしたバスターが戦える時間は知れている。特に美咲の場合、物体そのものを消滅させる力を放っているのだから…

「すばらしい…さすがはTEAMのサンプルだ」「ほざくな！」

美咲は風野博士に特攻をかけた！

「召喚…破壊神！」

破滅を望む神は風野博士に襲い掛かるが、風野博士はその攻撃すら余裕でかわしていた。

「さすがは影。召喚レベルがトップクラスだが…」

風野博士は右手を破壊神にかざすと、破壊神は一瞬にして弾けた。

「こ」の程度は義臣の足元にも及ばないな

「当たり前だ」

「なつ…！」

刃が後から振り下ろされ風野博士の頬を掠めた。

「幻術だからな」

美咲はニヤリと笑つた。

それにつられるかのように風野博士も笑つた。

「なるほど、リミッター解除で幻術を使うとはたいした戦略だ。ただ突つ込んでくる馬鹿とは違うようだ」

「お前は義臣に匹敵する頭脳の持ち主だからな。コミッターをはずしだけで敵わないことぐらいわかつてゐる。だが、このまま私も戦つことは出来ない」

口から血が流れてくる。早くも体が悲鳴を上げ始めた。

「私の専門分野は禁術に値する。だからこそ、今この力を解き放とう」

美咲はそれだけ言い残すと、自分を光へと変えた。

「まさか！！」

「そのまさかだ。お前を封じ込める。もちろん悠久の時とはいかないが、少なくとも次のバスター達が育つ時間は与えてくれる。

お前を殺す役目はあの子達にたくす！」

「やめろおーーー！」

断末魔の叫びと未来へ託された思いだけがその場に残つていた。

その頃、TEAM本社に一人の女が義臣と対面していた。

「久しぶりね、義臣君」

「痩せましたね、先輩」

につこり義臣は笑つた。

義臣に会いに来たのは翡翠の母親、風野星華だった。

「翡翠には会つていかないんですか？」

「ええ、さすがに起こせないわ。

それには、私がここに来たのは秀生の研究の危険性を知らせに来たの」

義臣は眉をピクリとあげた。

「秀生はたしかにあなたたちを救う手助けをして来たけど、細胞バンクの設立以来、かなりの組織が出入りしている。

それが例えTEAMの敵である組織でもその科学を売っているわ

「…確かに敵を救つてていることは黙認している。

だが、博士は医学でも無理だと言われている事を可能にして人の命を救つていいだけだ。

いくら敵であろうと命の重みはある。だから今回のブラッドの件は影を動かしたんだ」

義臣はいくら敵でも救える命は救いたいと思つていた。

抹殺指令を出すことは多々あるものの、一般のバスターまで殺すつもりはないのである。

「…義臣君、だけどクローン人間の研究は何のためにやつてるのか説明がつかない。

私も科学者として言わせてもらつわ。

秀生を信用しないで。いくら快君の細胞操作を施して優秀なバスターを作り上げてもそんなの命を弄んでるとしか思えない。何より、作られた人間だって快君が知つたらどうするの？」

星華は悲しい目を義臣に向けた。

だが、それ以上に義臣は苦しそうに答えたのだ。

「先輩、風野博士が救ってくれたのは快だけじゃないんだ」

「救つたって…それは」

「違わない。風野博士はTEAMを裏切るような人じゃないんだ。

先輩だってそうじゃなければ翡翠を産まなかつただろう?」

確かに義臣の言つ通りだ。

誰もが風野博士を信頼していた。それだけの事を風野博士はしてくれたのだ。

「先輩、細胞バンクの本来の目的は俺の解析できない細胞を調べるために風野博士が設立したんだ。

普通の人間の細胞が解析出来ないなんてことがあると思つか?」

それが物語つていることは一つだけ…

「博士が救あうとしてくれてるのは俺自身だ。俺は人間の可能性が低いんだよ」

衝撃の告白だった…

夢乃は呆然と立っていた。

義臣が人間じゃない、それが事実かどうかが現代医学でも科学でも証明できない。

だけど人間としての性質は備わっている。義臣はそんな存在だった。

「義臣君…確かにあなたの本当の両親は不明だけど…」

「ああ、俺は物心ついた頃から『ギャンブラー』に預けられていたからな。

確かに人間としての成長は遂げて来たが人間として不可解な事が多すぎる。俺を構成する細胞と血液は世の中に存在しないんだ」

星華は息を呑んだ。世の中に存在しない存在がここにいる。

「もちろん人として生きるのに事欠きはしないが、快に遺伝してしまった可能性が高かつたんだ。

その結果、何とか血液だけは夢乃の遺伝を受け継がせることに成功したが、その他全ては俺だった」

出来れば継がせたくないものだった。

しかし、どうしても快に受け継がれてしまったのである。

「自分が人間じゃないかもしれないと思つたとき、そんな訳無いだろうと笑い飛ばしてやりたいんだ。

だから風野博士は細胞バンクを立ち上げてくれた。信じるなつて方が無理だろ…」

「義臣君…」

星華はそれ以上何も言えなかつた。

義臣の苦しみはもちろん、扉の外で必死に泣くのを堪えている夢乃の気配を感じていたから…

「社長！ 大変です！」

氷堂仁一が屋根裏から下りて來た。

その体には無数の切り傷を付けていた。

「仁一！ どうしたんだ！？ 早く治療を「止めてください！ 総隊長が暴走しています！」

「龍一が！？ なぜ」

「霧澤部隊長が戦死！ 風野博士が行方不明になりその犯人を殺すために味方にも危害が！！」

それを聞いて義臣は瞬身で消えた。

龍一が暴走したとなれば時空間そのものが破壊されているはず。最悪の場合龍一まで失つてしまふからだ。

「何処だ！ 美咲を殺したのはどいつだあ！！」

「総隊長！？ 怒りをおさめてください！…」このままでは味方まで…！」

言い終わる前に完全に威圧されてしまう。味方の声など届いてなかつた。

「お前達、下がつてろ」

「社長！…」

義臣は龍一の前に立つた。

「…龍一、時空崩壊の力を解け。これは命令だ」「義臣…美咲は誰に殺されたんだ？ あいつを光にしたのは誰なんだよ！…！」

「守龍…！」

龍一の怒りを義臣は龍神を使って守る。

時空間に完全に歪んでいた。

「あいつは俺達を守るために命を散らした！ それを無駄にするな！」

「ふざけるな…！ あいつが自分を犠牲にしなければならない敵つてなんだよ！… 風野博士じゃねえのか！…！」

「違う！… 博士じゃない！…！」

「じゃあ誰だあ…！…！」

時空間に更なる亀裂が生じる。もはや感覚すら鈍り始める。

「…あいつが封印したのは風野博士のダミーだ」

「そんな馬鹿なことがあるものかあ…！」

「きけえ…！…！」

龍一を怯ませる強烈な霸氣が空間を支配した。

「…美咲はメッセージを残してたんだ。俺が造られた人間だという可能性は知っているな」

「…それがなんだよ」

「同じなんだよ…俺と同じ細胞だつたんだ…」

義臣の片方の目から一筋の涙が流れていた。

風野博士は人間だと証明されている。それは翡翠が生まれていることで疑いようのない事実だった。

「じゃあ… 美咲は」

「俺と同等か、それ以上の力を持つ風野博士のダニーと戦つて死んだんだ」

「じゃあ風野博士は…」

「美咲が残してくれた記憶を覗いた。風野博士は何人も造られ、本物は捕らえられていた！！」

龍一は一気に力を落とした。

人の記憶を完全にたどる能力を持つ義臣の力を疑えるはずがない。

それが光となつた人間のものでもだ。

さらりに美咲のことだ、死ぬ前に確実な情報を残しているはずだ。

「一体黒幕は誰なんだよ…」

「…探すしかないんだ。何年かかっても」

そして時は現代へ…

「やはり霧澤美咲と同じだ。君は弱い」

風野博士は氣絶した龍一に吐き捨てるのだった。

## 第四十四話・未来に託す思い

「つむのバカ息子は?」

TEAM総料理長、橋太陽は夢乃に尋ねた。

「大地ちゃんの命は何とか取り留めたわ。  
ただ、しばらく厨房に立つことは禁止ね。まあ、立てる状況でも  
ないけど…」

オペを終えた夢乃は一息付いていた。

何人も怪我人はいたが、今回の任務に白真の実家である色鳥病院  
のスタッフを応援に呼んでいたのだった。

「ふん、死のルーレットなど使つとはまだまだ修業不足だ」  
「仕方ないわよ、相手が相手だもの。それに相手を殺さなかつただ  
け立派だつたわ」

「ふん…あの気まぐれな死神が」

太陽は舌打ちした。『死のルーレット』は太陽が編み出した術である。

全てを運に委ねるとはいながらも、『気まぐれな死神の意志と術の使い手の意志も多少は働きもするわけだ。

とはいえども、未熟な使い手では当然高いリスクを背負つのである。

「それで、SHUNはどうするんだ?」  
「私の子だからもちろん守る。けど…」

夢乃是椅子に腰かけた。太陽は一つ溜息をつく。彼女の言おうとしていることは手にとるように分かる。

「S H I N E の体は確かに造られたものだ。お前と義臣の遺伝を継いでな。

だが、俺達の子供はすでに S H I N E を弟にしたがってる。今はそれでいいだろ？」「うん… そうだね」

夢乃是静かに答えた。

その同時刻、快は一人の人物と再会していた。

「…おばさん」  
「久しぶりね、快君」

快の目の前に現れたのは死んだはずの翡翠の母親、風野星華だった。ただし、グラフィックの…

「なんで…」  
「驚いたでしょ？ 私は死んでいるのだから」

快は気付いた。これは死ぬ間際に星華が残した遺志の残骸。おそらく、彼女の最期のメッセージだ。

「よく聞いてね、快君。この細胞バンクは風野秀生が設立した篠原義臣を救うための組織よ。

だけど、秀生の頭脳を付け狙う組織がちらつき始めた。一つが『プラット』、そしてもう一つが『ドラッグ』。片岡航生が潜入して

快は黙つて聞いていた。もうすぐ全てが見えてくるからだ。

「さつとあなたのお父さんは秀生を何とかして取り戻そうとしている。

それあなたに多くの不可解な行動をとつてこようとも思われるでしよう。だけど理由は必ずある…」

「おばさん、どうだ快は思う。だが、いつもよりどうしても納得いかない」とばかりが多ければ疑つてしまつ。

「おばさん、どうして父さんはそこまでおじさんを取り戻したいんだ？」

細胞の解析が不可能でも、SHINEのように造られたって人間だらうつ？」

それを聞いて星華は微笑んだ。一番聞きたかった答えだから…

「そうね、快君。だけどね、あなたのお父さんは科学者の風野秀生でも一般人でも助けたと思うわ」

「どうして…」

星華はキリッとした表情で言い切つた。

「篠原義臣はバスターだもの。それ以外の理由なんて必要ないわ」

すつきりした。ただその気持ちが快を包む。掃除屋なら任務を遂行するのが絶対条件。助けると決めたら何がなんでも助けるのだ。

「おばさん、翡翠に何を伝えたらいい？」

星華のグラフィックが消えていく。それは遺志が消えていくこと…

「親が望むことは一つよ。『幸せになりなさい』…」

星華は完全に消えた。そして快は天井を睨む。感じるのは気配…

「出でることよ、ドリッグ！…」

快が放った一撃の魔法は天井に穴を開けた。そして現れた男が一人…

「…ようやく辿り着いたようだな。快

「おじさん…？」

なんと…現れたのは片岡航生だったのである…

## 第四十五話・片岡航生

「よひ、戻つて来てたのか」

「久しぶりだな、義臣」

航生は不適な笑顔で答えた。

翔とは似ても似つかないワイルドな父親である。

「で、ここにいたドラッグの幹部連中は？」

「影に渡した。だが、風野博士の行方はわからないみたいだな」

「そうか、はずれか…」

義臣は溜息をついた。航生ほどのバスターがつかめない風野博士の行方だ。

おそれべドラッグの幹部を捕まえたといふで分からぬだらう。

「じゃあそろそろ快を氣絶させとこてくれないか？　ここからの情報は危険なんでね」

「なつ…！」

まさに一撃。義臣は首筋を打つて氣絶させた。

「で、何を掴んだんだ？」

「ほひよ」

一枚のティスクを航生は投げ渡した。

「ドラッグとブラックの金の流れだ。

この細胞バンクも絡んではいたが、どうやらここは俺達を呼び込

むためのダニーだったようだな。

数年前お前に渡したものは破棄してくれてもいい。あれは俺を騙した馬鹿が作り上げてたもんだ

「へえ～数学者の癖に騙されたんだ」

「まつ、そいつを消したおかげで手に入れたものだ、信用して構わない。

確かに証拠として副社長が戻つてくるはずだぜ？」

義臣は汗タラタラになつた。彼が絶対に苦手とするお田付け役が戻つてくるとなれば気が気がでない。

「その時、美咲の娘も一緒に帰つてくるはずだ。

言つとくがその娘は間違いなく命を狙われるぞ。副社長と父親が守つていたから今まで難を逃れていたが…」

「…大丈夫だ。快達は強くなつて来ている。それに必ず掃除屋界の闇は近いうちに現れる」

「お前を造り上げた組織か…お前の本当の両親はそこにいるんだろうな…」

それだけ言い残して航生は消えていった。

「…さて、俺も帰つて寝るか」

「その前に治療が先でしょ、社長」

現れたのは氷堂仁のチームだった。優奈と秘書の智子、そして夢乃が指導している治療兵の中村が現れた。

「社長、早く傷を見せてください。あれだけの数のクローンを相手にして傷一つも負つてないわけがないんですから」

中村は義臣を座らせ治療を開始した。外傷はぼんくとも、内部はかなりの酷使していた性かガタガタである。

「快は大丈夫なんですか？」

「うん、気絶してるだけだ。ただ、しばらくは動けないだろう。リミッター解除してみたいたからね」

応急処置が早かつた性か、命を失う状況ではなかつた。

「とりあえず、本社に戻る。多分今回の件は全員に説明しないと怒られるだろうしな…」

それだけ言い残して義臣は眠りについた。

しかし、細胞バンクの戦いは一時期終結したのである…

## 第四十六話・任務完了

任務終了明けの朝、快は血溜のベットで夢乃と話していた。いつもより満面の笑顔を浮かべて居る母親と…

「期末試験には間に合わないわね、快ちゃん」

「…母さん、ちいしく楽しもうだな」

「やつ… 父さんじやないんだから喜んではいけないわよ。」

とは言しながらも、息子との時間を楽しんで居るのは確か。紅茶まで持ち込んで居るのだから…

「それで、SHIONは？」

「SHIONちゃん？ 陽子ちゃんと一緒に遊んでるわよ」

「母さん…！」

いきなりの爆弾発言に快はベットから飛び出やつしたが、夢乃の魔力がそれをさせなかつた。

「大丈夫。SHIONちゃんの記憶は科学班が消したわ。だから陽子ちゃんに殺されそうになつた記憶はないの。」

さらに陽子ちゃんには悪かつたけど、SHIONちゃんを殺やつとした記憶はないわ。

もちろんその場にいた修やんと翡翠やんの記憶もね

「それって…」

快は何とも言葉では言えない感情に支配されたが、夢乃は紅茶を一口飲んで答えた。

「いいのよ、まだ SHINEちゃんは七歳なんだもの。これから算星小学校に通つて大きくなつたらいいの。

快、SHINEは小さい頃は病弱だったから幼稚園に行つてないと記憶操作したわ。

けつして造られたつて言わない」と。それにね、母さんは快が立派なお兄ちゃんになつてくれると思つてるわ

「…あいつが俺を兄だつて思つてくれるなら俺も弟だつて守るわ

八年前、自分の性で流産した夢乃に対しての謝罪の気持ちは強いが、弟が出来たことに少しだけくすぐついたい気持ちにもなる。

「だけどどうする? 快ちゃんも悪いことひるだけ記憶を消してあげてもいいけど

「夢乃さん、そりゃ甘やかしちゃだら」

楽しそうに部屋に入つて来るのは自分が期末を受けられなつぐらい氣絶させた父親である。

「よつー、相変わらず機嫌悪そつだな

「あんたの性だろ、今日の期末受けられなくなつたのは、  
「お前どのみち動けないだる」

確かに義臣の言つとおつだが、ベンぐらつて動かす力はある。

「あれぐらつー田でやれ。それに大原ちゃんから全教科の問題は預かつてるから

たすがは担任である。全て予測済みだ。  
快は問題を受け取るなり、さうわらつてベンを動かした。

「それで、話してくれるんだろ？ 今回の件に俺達を動員した本当の理由」

テスト片手に話は出来る。快はそれだけ優秀である。

「ああ、まず紫織達に細胞を盗ませたり、修に情報収集させたりと高校生バスターをやけに使ってたことから気になってるだろ」

「ああ。今回の件は親父にしてはありえない人選が多かつた気がしてな」

皮肉が半分だが、義臣はさりと答えた。

「あれは囮だ。TEAMの高校生バスターの力が強いと思わせとけば、やたらにその逆に取られたとしても奴らをおびき寄せるきっかけになつた」

「十分な返答である。TEAMの細胞というだけで科学者達が涎を垂らして追っかけて来たのだ。」

おびき寄せるには持つてこいの囮達である。だが、納得いかないこともある。

「じゃあ、咲とライ・タナーを闘わせた理由は？」

ライ・タナーの力は咲の倍だった。そんな相手と咲を闘わせたのである。

「…咲から言い出したことだ。相手が自分以上の力量だつたらすぐには航生を呼び戻せとな。」

分かつてるとと思うが、咲は影の部隊長だ。お前達は酷だと思うかもしれないが、命をかけてもらうしかない」

「…ああ

快はそう答えることしか出来なかつた。

影とはそんな部隊だ。

「あと、陽子の監視は細胞バンクのスパイ、さらにあいつがSHINEを破壊する事が目的でこっちに戻つて来たと情報が入つたからな。まあ、そのあたりはお前も気付いていたはずだろ？がまさか本当にSHINEを守つてくれるとは…」

「俺と同じ細胞を持つクローンの破壊、それでピンと来たよ。親父が細胞関連のヘマを仕出かすとしたらハ年前しかない。それに細胞バンクなら人間を作り出す可能性があるし、普通ならそれを守れというはずだ。

まあ、修が掴んだ情報があつたから確信したんだが」

任務前、修が見せてくれた細胞バンクのデータ中にSHINEが人間である可能性が高いと確信した。

陽子の性格から細胞バンクの最高傑作であるSHINEが危険因子である以上、自分の失態だとと思い破壊する可能性を考慮していたのである。

「仲間に弟を殺させるわけにはいかないだろ」

「上出来だな。とりあえず、今回の件はきりきり合格だろ？

「あら、それは厳し過ぎない？」

「夢乃さん、快は隊長の任務は果たしたが先発隊は大地が重傷、さらに修と陽子が闘つ羽田になり、おまけに翡翠も魔力を使い果たしてるんだ。まだまだあまい！」

結局は予測通りの点数を父親に出される。しかし、今回は夢乃が

快の味方だつた。

「あー、そういうならあなたも今回は落第点ね」

してやつたりと快は微笑を浮かべたが、やはり義臣は鮮やかに、尚且つ快を激怒させる方法など心得ていていたのだ。

「ああ、だから夢乃さん、今夜は慰めてくれよ」

夫婦のうつとうし、ぐらい甘い空気に息子はブチ切れた！

「おこ... クソオヤジ、わざわざ仕事しちゃ...」

任務完了。

## 第四十七話・期末試験結果発表

期末試験終了から二日。高校生バスター達の怪我は完治していた。そして彼等は夏休みを楽しく迎えるための決戦の地にいる。

「やつぱり快が一番か」「すういねえ」

篝星名物、テスト結果上位者張り出しベスト50。相変わらず一位には篠原快、時枝修と書かれているわけである。そして高校生バスターの面々はそれぞれの結果を確認しに来るのである。たいてい上位50位に入ってる者達だからだ。

「快ちゃん！ 愛の抱擁してあげる～！」「くつづくな！ つづとつしこ～！」

白真のお決まり行事も快が一番をとったときの抱擁である。それを首根っこを引っ張つて止めるのが紫織だ。

「やめなさい！ 白、今回は何を間違えたの？」「うへん、一点が気になるよなあ」

快達と一点差で色鳥白真の名前が続く。

「どうせ力尽きて一問見逃したんだろ」「確かに。化学の時間にすぐ力尽きていたし

白真が一位にならない理由は力尽きてぐつたつするからである。

「それにしてもういちのクラスは上位に入る奴が多いよな。快に修、白真は絶対ベスト3だし、紫織も8位だし」

「咲ちゃんも11位だよ！ いつ勉強したんだろ？」

全くの謎である。咲は期末試験の勉強をしていた記憶などない。間違いなくじぶんの今までの知識を総動員した結果だ。

「…それに比べて大地と翔、龍一は赤点組か…」

「翔ちゃん数学は百点なのに…」

「仕方ないだろ。他の教科はさっぱりわからん…」

間違いなく数学と体育の時間以外はほぼサボってる結果である。そして結果さえ分かれれば当然夏休みの予定に話は変わる。

「紫織、夏休みは温泉に行こう！ 混浴」

「嫌よ！ 足湯になら付き合つてあげるわ」

さすがは白真の彼女だけあり流し方は元壁である。

「陽子、夏休みになつたら墓参りに行こうつな  
「うん」

修と陽子にいたつてはいかにも恋人らしい空気が漂つ。お互いが闘つた記憶も、陽子がSHIENを殺そうとした記憶もないのだから…

「俺達は補習かよ…」

「頑張れよ、俺は古典だけだからな」

「私も勉強には付き合つたげるよ」

大地、翔、優奈の予定は決定である。  
ちなみに優奈もテストは20位と優秀である。

「快、ちょっと来て」

「ああ」

浮かない顔をした少女が一人、翡翠だ。  
その様子を見ていた友人達が騒ぎ出す。

「どうしたんだ翡翠……」

「ついに告るか？」

友人達の言葉はもちろん違うと誰もが思っていた。  
それだけ翡翠の空気が普段と違っていたからだ。

## 第四十八話・騒がしい夏は始まる

翡翠が強引に快の手を引っ張つていく。  
滅多にない強引さに多少快は不思議に思つたが、それでもいつも通りに聞いてやるのだ。

「どうした？ 夏休みならちゃんと花火大会に連れていくてやるが？」

「違う！ 聞きたい」とがあるのー。」

その反応で今回は真面目な話だと確信した。そして屋上に着けば真摯な瞳を向けてくるのだ。

「一体どうした？ お前らしくない？」

こんな場面では相手を和らげてやつた方がいいと快は心得ている。  
相手が翡翠ならなおさらだ。

「…お父さんは敵じゃないんだよね？ 信じて良いんだよね？」

ストレートである。快に対しての質問に翡翠がカーブを投げるなんてことはほぼない。だからこそ快は真っ直ぐ答えるしかないのだ。

「翡翠、確かに今回は風野博士のクローンが敵になつたが、お前の母さんは博士のことを信じた。だからお前も信じてやれ」

「…証拠は？」

「翡翠？」

「証拠がないよ… お父さんの研究はいつも皆を苦しめてばかりだよ… この前のデビル・アイだって今回のクローンだって快を怪我

させてばっかりじゃない！

どうしたら信じられるのか分からなによ…」

滅多に泣かない少女が泣いている。

ブレイブと戦った時も自分の父親の研究が絡んでいた性か、翡翠は責任を感じてならなかつた。

だが、快は一つ溜息を付いて話始めた。

「翡翠、俺の血液が何型か分かるか？」

「きなり変わった話に翡翠は治療兵なりではの答えを返した。

「A型のマイナス…」

「そうだ。持つ奴は少ないが母さんと同じだ。だが、親父の血液なんてこの世にないだろ？」

風野博士は俺が怪我してもいいよ、俺が生まれる前に血液操作をして助けてくれた人なんだ。治療兵ならその事の重大さが分かるよな？」

十分だ。血液がないことが命取りになる場合は多々あるのだから…

「だからさ、お前も気に病むな。風野博士は絶対TEAMが救い出す

快の言葉に翡翠は穏やかな笑みを浮かべた。それは夏の空にあって快の心を揺さぶる。

「あのわ…翡翠」

「ん？ 何？」

キコトンとした表情を浮かべた翡翠とは対象的に快は真っ直ぐ翡翠を見た。

「俺は、お前のこと……。」

快は翡翠に近づいていく。が！

「快ちゃん！ 任務だよ！」

突然飛び込んで来た間の悪い奴が一名。色鳥白真である。

「任務……」

「この時ほど任務を怨んだ」とはない。  
そしてさりに続く悪循環。

「あー……翡翠が泣いてる……。」

「快！ あんた翡翠に何言つたの……？」

友人達が口々に文句をたれる。間違いなくこのあとにバスタークラスの批難の嵐に遭わなければならぬ。

「違うよみんな！ 快は悪いんじゃないよ……。」  
「風野さん、何も言わなくていい。篠原は泣かせるよつなこと……  
たんだうっ！」

「そうよ……。明らかに悲しんで泣いた後じゃない……。」

そうとなれば自然と快に批難がいく。もつと云ひたいではない。

「快、覚悟なさい……。」

紫織の鉄拳が快に襲い掛かる。

快の恋路はまだまだ厳しく険しそうだ。

：傍目から全てのいきさつを見ていた少女が一人呟く。

「これから楽しくなりそうですね、龍一さん」

「ああ、間違いない」

騒々しい夏が始まろうとしていた。

## 第四十八話・騒がしい夏は始まる（後書き）

これでTHE TEAM!（2）は終わりです。

次は今回より面白くしていきますよ！？

何より、血口紹介コーナー再開しなくちゃ

では、THE TEAM!（3）でお会い致しましょう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0939e/>

---

THE TEAM! (2)

2010年10月12日15時27分発行